
LENDY CROWZ 第二部

秋山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LENDY CROWZ 第二部

【Nコード】

N1347C

【作者名】

秋山

【あらすじ】

レンディ・クローズ第一部の続きです。

これまでのお話

僕はもともと普通か、それ以下の少年だ。

きっと何処にでもいるような、ネクラ系のさえない、コレといって特技も無い。

ただ、本を読むことは他の何よりも大好きだった。

しかし、これがネクラという肩書きをさらに強調するものなのだろう。

誕生日に本をたったの一冊でもプレゼントしてもらえれば、それで大満足だったし。

そんな僕は、あることを切欠に、魔術師になった。

その切欠というのは、単に、僕の携帯電話に見知らぬ男からのメールが届いたことだ。

僕がそのメールに勝手な好奇心を寄せた。そして、そいつとやり取りをして出た結果がこれだ。まったく、かたじけない。

魔術師になる儀式は、とんでも無いものだった。これが現実の世界で起こったら、誘拐か、殺人未遂のどちらかに決まっている。

それにしても、僕のどこがどんな風に魔術師になったかなんてわからない。僕の大好きな本に出てくる魔法使いキリマン・ジェーロの使っている呪文を、この前ベッドのなかで誰にも見つからないように、こっそりと試してみたけど、何もでてこなかった。

サンダー・クラッシュなんて技は繰り出せないし、箒で空を飛ぶこともできない。(ご存知の通り、僕は魔法戦士・キリマン・ジェーロの大ファンだ)

しかも、あの日からというものの、妙にリアルな夢ばかりを見て

いる気がする。一体、これはなんなのだろう？

現実世界と対して変わらない世界が、夢の中にもできはじめているらしい。

だから、朝目が覚めると、変な感覚になっているときがしょっちゅうある。

現実世界なのに、まだ夢の世界とつながっていきそうな感じで、現実味が無い。

朝起きたとき、よくほおをつねってみたけど、痛いときでも、夢の世界だった、なんてときがしばしばあった。

だから、そのうち、今僕がいる世界が夢か現実か、わからなくなってしまうのでないかと思うと、怖くてたまらなくなる。

それにしても、あの日、リトル・ビーニーは、冬休みになったら、また会おうと言っていた。また会うだなんて、ごめんだな。僕をあれだけ怖い目に合わせておいて、お次は一体どんなことをされるんだろう？

でも、このことを相談しようとは思わなかった。だって、僕を魔術師にした本人じゃないか。最低限の責任はとってもらわなくちゃ。

それにしても、どうして彼は”冬休みはできるだけあけておけ”といったのか。それが気になるところだ。

もしかしたら、冬休みに魔術の修行をするのかも！

でも、一体どんなことをするんだろう……？

気になるなア。

そんなことを考えながら、僕は今日も学校へ行った。

第二十四話・密告・

昨日は、リトルに車で送ってくれたけど、家に帰るのが予想以上に遅かった。

しかも、いままで外出禁止にされていたせいもあって、「まったくこのどら息子は！」などと、母に、もしかしたら立ち直れなくなるんじゃないかと思うくらいに、強くしかりつけられた。そのせいで、僕は朝から機嫌が悪い。

しかし、暗い表情をしながら教室に入ったときでも、ジェシー（友達のジェシカ）は元気よく僕に話し掛けてきた。

「おはよう!」

まったく、これだから僕の苦勞を知らない人間は……

「おはよう、ジェシー」

僕は低い声で力なく答えた。

それにしても、いつもと変わらない教室、クラスの皆。

「昨日、レンディーの家に連絡網を回したのに、お母さんに出られてビックリしたわ」

「ごめん、昨日は体調崩して寝込んで……」

嘘だ。

「え、そうなの？ 体の具合は大丈夫？」

「もちろん、大丈夫だよ」

僕は作り笑いで彼女をごまかした。

本当のことを言えば、昨日は首を切られた後、棺桶に入れられた。

でも、そんなことを話したって信じてくれないってわかっている。

だから、僕は嘘をついた。

「ねえ、レンディ。そろそろ白状したらどうなの？」

「え、何のこと？」

しかし、彼女は既に僕の心のうちを見破っているようだ。

「体調崩してたなんて嘘のくせに。昨日、貴方の母さんに聞いたのよ。そしたら、レンディはまだ帰ってないって言った。時間からしても、午後の7時は過ぎていたの……と、いうことは、何かしていたんでしょう？」

これだから頭の良い奴は！

「……そうだよ。昨日は」

果たして、ここから先のことを話すべきなのだろうか。

リトルは身内には魔術師であるということバラしても良いと言っていた。けど、友達に関しては何も言っていなかった。

……別に、リトル本人が見ているわけじゃないから、いいよね？

「昨日は……」

僕は、自身の身に起こったことをそのまま彼女に伝えた。

リトル・ビニーという人物と連絡を取りあって、そのあと拘束されたこと。

車でつれまわされた後、得体の知れない場所につれてこられて、首を切られたこと。

そして、それがすべて学校で行われたということ……

「でも、本当に僕が魔術師になったかどうかなんて、わからないんだ」

すると、ジェシーは噴出した。

「それなら、そのリトルって奴は詐欺師ね。ううん、詐欺師ともいえないわ。一体何のつもりかしら？」

大笑いしているジェシーのかたわらで、僕は真剣に言った。

「それが、僕にもわからないんだよ……。未来人のすることなんて」

すると、ジェシーは話を切り替えた。

「とにかく、そこに私を連れて行ってちょうだい！」

「ええっ」

「だいたい、彼女が何を言い出すかなんて、予想してはいた。だって、学校で起こったことだもの。そんな身近に、存在するもの」

だったら、是非とも確かめたいと思うの普通だろう。

しかし、僕は気が進まなかった。だってだよ？ 理科準備室といえば、いつもあの先生が……。そう、あの憎たらしい理科の先生がいて、先生のまともない付けでもない限り、絶対に生徒を理科準備室へはいれようとしない。しかも、あの理科の先生にはウイルソン・クロムウエルという助手がいて、そいつも同じように理科準備室へは絶対に生徒をいれようとしない。むしろ生徒達を嫌っている。

だからきつと、生徒どころか、他の職員でさえ、ろくにあの部屋へは入ったことが無いのだろう。

そんなところに、行くのか……。気が引けるな。

とは、思ったが、その後も2度3度ジェシーに迫られたので、僕は「はい」といわざるを得なかった。断ったのに。

そうこうして、放課後。僕たちは、理科準備室へと向かった。

僕たちが理科室の前の廊下に忍び込み、ドアを探った。

最初から僕たちはドアの鍵がしまっていることを予想していたが、なんと、理科準備室のドアは鍵が開いていた。

僕はそつと理科準備室のドアに手を当て、3センチほど音を立てないようにして隙間をあけた後、中を覗き込んだ。

「だれかいた？」

後ろのほうでジェシーがひそひそと話し掛ける。

「ううん、誰もいない」

「じゃ、入りましょうよ！」

「わ！ ちょっと」

ジェシーにどんと背中を押されたので、その反動でドアがグアラ！っと一気にひらかれ、僕は理科準備室の中に転がり込んだ。

すると、同時に、埃とアルコールの混じったようなきつい匂いが鼻を突いた。 理科室独特の、“あの匂”だ。

そんなことよりも、本当に誰もいないか、もう一度確かめてみた。

室内はしんと静まり返っていて、僕たち以外に誰かがいる気配は無い。 一安心だ。

僕は、リトルにつれられて神殿のような場所から出てきたときのことを思い出せる限り、思い出してみた。

準備室には、入ってすぐ右のところに鍵をかけてあるA4サイズのコルクボードがあり、部屋の中には机が3台おかれている。

壁伝いにぎっしりと張り巡らされた薬品と試験管の行列以外には…… あった！ あそこだ。

ほとんどビーカーしか入っていないガラス張りの戸棚からわずかに顔を出している。 灰緑色のさびついたドアが……。

きつと、僕たちはあそこからあの神殿のような場所に入りに入っていたんだ。 いや、そうに違いない。

しかし、どうして“あのドア”のところに戸棚があるんだろう？ 昨日は無かったはずだ。 まあ、いい。 とりあえず、あの戸棚

をどかさなくちゃ、中へは入れない。」

「ねえ、来てよ」

「何？」

「戸棚をどかしたいから、手伝って」

すると、ジェシーは気が進まない様子で、肩をすくめた。

「レンディ、一人でできないの？」

「もしも、僕が戸棚の下敷きになって死んじゃったら、ジェシーはどうする？」

僕が腹黒くにやけると、ジェシーは”馬鹿みたい” と言ったように、ためいきをついて、僕のところへきた。

「どうしてもってことね」

どうせ、ひとりじゃ棚一つ運べないなんてことはジェシーもわかっているはずだ。

うんせ、うんせ、と戸棚をずらして、やっと人が一人通れるくらいの隙間ができた頃、すぐ脇にあった窓越しに黒い人影がぬっと現れた。

ケビンだ。

第二十五話・密告2

「やあ、二人でデートでもしてるの？」

調子のいい声で、ケビンが僕等のことをおちよくってきた。彼の隣にはつれのリップいる。 彼

「なんだよ。 ケビンも混ぜてほしいのか？」

僕が皮肉っぽくそういうと、ケビンは鼻をこすって、笑わせるんじゃないねえといったように返事をした。

「ごめんだね！ それよりもどうしてこんなところにいるんだ、お前等？」

どうしてって……

僕は、ケビンには”あの神殿”のような場所があることを知られたくなかった。

彼は「俺は魔術師になるんだ」とか理解不能なことを行っていたが、どうして僕等が彼以上に魔術師のことについて深い事柄を知っているのかなんて、彼は知らないだろう。

でも、彼のことだから、それくらいの知識は持ち合わせていそう。あの神殿で、彼はもしかしたら魔術師になろうとしているかもしれない。もしくは、もうなっている……？

いやいや、まだ自分の目で確かめワケじゃないんだから、そうとは決め付けられない。

でも、あまり多くの人間に秘密にしておかなければいけないよう

なことを話すのは気が引ける。

ましてや、ケビンに？ 僕が彼と同類になっていることなんて…
…ジェシーの前で、そんなこといえない。言ったらって、ますます
ことがおかしくなるだけだ。

それに、仮にも僕がケビンより先に魔術師になっていたとしよう。
彼はどう思う？ 僕をひやかしてくることなんて目に見えている。

僕は、ケビンに

「ケビン達には関係ないよ」と、無表情で答えて、彼の興味を退け
ようとした。

すると、ジェシーも口を挟んできて僕をフォローした。

「そうよ。 もともと二人だけであるつもりだったんだから」

しかし、今度はそれを聞いてリップが

「おい、本当なのかよ」

と、ケビンに向かって耳打ちをし、何かを仄めかす。

それを聞いて、ケビンはビーズのような小さい目を今にも飛び出
しそうなくらいにひん剥いて大声を出した。

「やっぱりデートか！ ヒューヒュー。 皆に言いふらしてやらあ
」！

さっきジェシーの言った一言を勘違いしやがったんだ！

しかも、皆に言いふらすだと？！

僕は頭にきて、思っていたことを口にした。

「お前だって、魔術師じゃないか！ 知ってんだろ？ 隠し扉があ
ること！」

しかし、口止めされていたことに気づいたのは、言ってから数秒たつてからだった。

扉があることを知っているのは、僕だけのハズなのに……これで彼に僕が魔術師であることが完全にバレてしまった。

そして、ジェシーとリップにもバレてしまった。

隠し扉があることなんて、勝手な思い込みで聞いてみたけれど、彼は氷のような表情で何も言おうとしない。

その恐怖をあおるように、あたりは、しんとして静まり返った。

ジェシーはわけもわからず、ぽかんと口を開いて、ケビンのことを呆然とながめている。

そして、リップは、眉毛を片方上げて、ケビンの顔を覗き込み、冗談だろ？とでも言いたそうな薄ら笑いを浮かべ、ケビンはいえば、その二人には目もくれず、僕の顔を驚いたのかキれたのかわからないすさまじい鬼のような形相でにらみつけている……まずいことになった！

しかし、次の瞬間その鬼のような形相がふつと緩み、彼はクスクスと笑い出した。

「フン、そうさ。俺は偉大な魔術師だ！」

意外だ。

僕は間が抜けて、啞然としてしまった。すると、そこへ理科の先生の助手であるウィルソン先生がドアを開けて中へ入ってきた。

「君たちは……」

先生は僕たちを見るなり、驚いてめがねの縁をつまんで目をぱちくりさせると、いぶかしげに僕たちに向かって質問を投げかけてき

た。

「……………どうしてこの部屋にいるんだい？」

「わあ、ごめんなさい！ 先生」

するとジェシーは、先生が言い切る前に急いでウィルソン先生に頭を下げた。僕もそれを見て、頭を下げると、すぐさまピーカーの入った戸棚を元に位置に戻して証拠隠滅を試みた。

しかし、先生は、既に気づいている。今更、努力したって無駄だ。しかもそれを見るや否や、ケビン達はそそくさとその場から逃げ出していった。なんて奴だ！

ウィルソン先生は、ケビン達に対してか、僕たちに対してかわからないが、軽く舌打ちをして、腰の後ろで手を組んで背を向けた。

「……………ジェシカとレンディはあとで職員室へ来なさい」

第二十六話・密告3

僕たちは、職員室に行くまでの間、ずっと沈黙を守っていた。

ローテーションもいいところだ。

ウィルソン先生は、僕たちよりも早く職員室へ向かったので、僕とジェシーが廊下を歩いている間、彼の姿は見えなかった。

ウィルソン先生とくれば、リングみたいに丸々とした体をしていても、異様に足が速くて、いつでも神出鬼没だ。生徒達はめったに見かけたことが無い。でも、今、僕たちはその先生とじっくり話し合う機会をもらってしまった。それも、”怒られる”という名の話し合う機会を……。

僕は、時々逃げ出したケビン達のことを思い出しては、ためいきをついていた。

あいつらとよければ、先生が来たらとつと逃げ出しやがって……。まったく、許せない！

「そんなに落ち込むこと無いわよ。私に変な好奇心を働かせたりしなかったら、こんなことにはならなかったんだから」

ジェシーはそつと、僕を励ましてくれたが、僕の気分は一向に晴れなかった。

「ジェシー、自分のこと責めちゃダメだよ。どうせふたりとも怒られるんだ」

僕たちは、顔を見合わせてから職員室のドアをあけ、ウィルソン

先生のいる机へと向かった。

ウィルソン先生は、右手の人差し指と中指にタバコをはさみ、親指でそれをいじくり回していた。垂れ下がったマユの下からは嫌な目つきが覗いている。

僕とジェシーは、先生の前に並んで気をつけの姿勢で立ち、怒られる準備をした。

「フウ、まったく。 どうして準備室なんかに入ったんだ？」

先生は安楽チェアにドツカリとだらしなくもたれかかり、右手に持っていたタバコを肘掛に備え付けの灰皿に押し付けた。

「それは……その……」

僕は秘密を守りたかった。 けど、大人に嘘をついたって、見抜かれるのは百も承知だ。

先生の突き刺すような眼光がそれを悟っている。 正直に言うしかない。

「実は……」

すると先生は意外にも、僕の話聞いて盛大に笑った。

「ハッハ！ 君は作り話の天才だ」

しかし、先生の機嫌を取れたのはいいものの、僕の言いたかったことがいまいち伝わっていないようだ。

「違うんです！ これは作り話なんかじゃ……」

「レインディー。お前の想像力がたくましいことは、クラスの担任からとうに聞かされとるぞ」

先生は、笑いを隠すために一度咳払いをすると、その顔からさっきまでの笑みが消えて、さっと険しい表情になった。

「先生をからかうのもいいかげんにしてくれ。馬鹿も休み休み言うものだ」

僕はしょんぼりと下を向いた。

「先生が……信じてくれないのでしたら、一向に構いません。僕は本当のことを言いました」

先生は僕の言ったことにあきれ果てて、溜息を漏らすと、今度はジェシーの方を向いた。

「では、ジェシカ。お前もこの子に同行したんだな？」

「はい……」

「では、同罪とみなそう。今回のところは多めに見てやるが、次は絶対に許さんからな。ああ、絶対にだ」

先生からのお小言を受けた後で僕たちは職員室を出た。

ジェシーは職員室を出た瞬間、早速のど奥にしまいこんでいたことをぶちまけた。

「あの先生、どうかしてるわー！」

しかし、僕が「うん、本当にそうだね」と言いかけると、彼女は「でも、今回のことは、ドンマイ！ 私気にしてないから」と、笑顔でそう言つて、僕の肩をポンと叩いた。

さつきまで、本当に僕と一緒になつて先生に怒られていたとは思えないくらいに、彼女はハキハキしている。

しかし、僕は彼女に神殿のような場所について話したことをすごく後悔していた。

先生には、あの扉のことがわからなかったのは良いものの、ケビンやリップにまでバレてしまった。

バラしてしまったことで、何が悪いかといえば、僕が魔術師になった時点でケビンが一体何をしでかそうと考えているか、わからないところだ。

あの日記の件といい、口止めされたことといい……。

だから、なおのこと、ケビンに対する妙な恐怖心はとどまることを知らなかった。

準備室で、僕が彼を魔術師だつてバラしてしまったときに、僕のことをにらみつけたあの目、あの表情。

今でも鮮明に頭の中に残っている。しかし、彼のあの態度の裏に隠された、真実は謎のままだ。もしも、僕に彼の心の中が読めたら……！

一通りおしゃべりが終わった後、ジェシーは急ぎの用事があるといつて、そそくさと学校から立ち去った。

残された僕は教室に置きっぱなしだったりリュックを取りに行った。

そのとき、僕は一番会いたくない人物と出くわすことになってしまった。そう、教室に飛び込んできたとき、教室のど真ん中で、なんとケビンが待ち構えていたのだ。

「なア、どういうことだよ」

彼は、下を向いたまま、上目遣いで僕のことをにらみつける。

「何？」

「わかってんだろ？ 俺が魔術師だって、あの時バラしたことさ」

そう言いながら、でかい足音を立てて、僕に迫ってきた。

「ああ、あれは冗談に決まって……」

僕は笑ってごまかそうとしたが、ケビンが表情をこわばらせたまま、微動だにしない様子を見て、笑いが通じないと察し、そのまま言葉を飲み込んで黙りこくった。

「じゃあどうしてジェシーもつれてきていた？ まさか、本当にデートに誘ってたとか、言うんじゃないだろうな」

あたりし静まりかえっていて、外から吹き付ける風がカーテンを揺れ動かす音しか聞こえない。

ケビンは続けた。

「どうせ、隠し扉だとか何とかを見せたいと思ったんだろっ？」

「それは……」

僕がいつまでももじもじしていると、ケビンは突然、凍りついた表情で言い放った。

「お前だって、魔術師ならわかるハズだ。一般人がこの世界に入ってきたら、危険だってことをな」

第二十七話・魔術師の隠し立て

「どうして、魔術師ばかりにこだわってるんだよ！」

僕にはケビンの言っていることが相変わらず理解できなかった。
むしろ、理解したくもない。

「そもそも魔術師ってなんなのさ」

すると、ケビンはケツと皮肉たつぷりの笑みを浮かべた。

「魔術師が何かって？ お前、魔術師のクセにそんなこともしらないのか？ ケツ へっぽこ魔術師が。」

彼等は危険で、何をしでかすかわからない……人間の皮をかぶったバケモノとでも言おうか」

「ちょっと、待て。どうして僕が魔術師だってわかるんだ？」

「あの扉を知っているものは魔術師しかいない」

やっぱりケビンは本当の魔術師だったんだ……。

「確かにそうだよ。僕は……別に魔術師になりたくてなったワケじゃないよ」

しかしケビンは僕の意見を聞かずに、噛み付いた。

「そんなこと知るか！ 外部に魔術師であることがばれたら、そいつを魔術師にするか、抹消するしかないんだよ」

そついい終わると、かつて無いほど不気味な笑顔でこう言った。

「もちろん！俺なら、抹消するを選ぶけどな」

ケビンが一步步僕のほうへ付かずいてくる。彼の視線はまっすぐと僕を見据え、獲物を捕えたハイエナの様に口の縁がつれあげている。

あと一歩で僕と鼻がくっつくところで足を止めると、彼は僕の顔面に手をかざした。

「汝、影の世界より現れし、ここに来たれり」

ケビンがそついい終わったと同時に、僕の背中にはまるで氷水をたらされたかのような悪寒が走った。

それは脊髄を這い上がり、脳の中にまで広がって、僕の思考を凍りつかせる。

冷たく張り詰めた空気が教室の中を満たした。

その恐怖で、怖気づいてしまったのか、はたまた彼の力によってか、僕は一歩たりとも動けなかった。

ケビンの顔に目が釘付けになっている。吸い込まれそうな、冷酷で、悲しみを帯びた目に。

その瞳に生命力を吸い取られていくかのように、体温が下がり始めた。リトルに首をきられた、あのときの感覚にそっくりだ。それと同時に、何か体がきつく締め上げる感覚がある。

まるで僕から生命力をしばらくだそうとしているかのように。

「」

身もだえしてなんとか彼の呪縛から逃れようとした。しかし、足に力が入らない。僕の足は震えるばかりで、前へも後ろへも進められなかった。

もうダメだ……意識が保てない。ひどい貧血になったときみたいに、視界がどんどん暗くなっていく。

そのとき、ケビンはふっとかざしていた手を下げた。

さっきまで僕の体を支配していた冷たい空気が余韻を残して去ってゆく。

すると、指先からじんわりと血管が広がって、次第に体温がもどってきた。

「お前が本当の魔術師なら今の技を防げたはずだ。フン、お前みたいな奴が魔術師になったなんて、とんだ魔術師の仕業か……それともただの自惚れか？」

ケビンは薄ら笑いを浮かべながら僕をなじった。
違う！そんなんじゃない！

「だって、リトルが……！」

「リトル？」

しまった。つい彼の名前を出してしまった。

どうしよう……彼の顔が頭に浮かぶ。ケビンにもジェシーに話したときと同じことを話すのか？

もしかしたら、ケビンはジェシーとは違うように僕の事情を捉えてくれるかもしれない。

すると、ケビンが突然釘をさした。

「リトルって、もしかしてお前を魔術師にした奴か？」

「どうして知ってんだよ！」

「イニシエーションは、特別な場合を除く限り一人で行うことは無
いからな。最低でも、一人は魔術師が必要だ」

嘘だ。ちよつとまで。

ケビンが言っていることが、本当だとしたら、やはりリトル・ビニ
ーという人物は魔術師だったのか？

彼は未来人だと名乗っていた。いや、未来人だろうが魔術師だろう
が、ペテン師と何ら変わらない奴に決まってる。

「無論、俺はちゃんと選ばれた魔術師で正当な場でイニシエーシ
ョンを受けた。」

ケビンは一旦間を置くと、消え入るような声で言った。

「でも……俺には……」

すると、彼は不意にうつむいて、鼻をすすった。両手で握られたこ
ぶしが震えている。

「俺には……」

次の瞬間、ケビンは顔を振り上げて涙ながらに叫んだ。

「何も知らないお前に何がわかる？ お前のようなへっぴこな魔術

師なんてこの世からいなくなればいいんだ！ 所詮、力のあるやつだけが、生き残れるんだよ！！ 今に見てる？ ジェシーもリップも、そしてウィルソン先生も俺がこの手で抹消してやる！！ レンデイ、お前は彼等が死んでいくところを精々ハンカチでも持ってみてるんだな」

第二十八話・魔術師の隠し立て 2・

ケビンはそう言い放つと、僕に勢い良く肩をぶつけて、教室を出て行った。

僕は、ケビンに何か悪いことを下のではないかと何でも今までの行動を思い返してみた。

しかし、何も心当たりが無い。

魔術師が人間の皮をかぶったバケモノだつて？

もしもリトル・ビニーがそんな風だったらどうしよう……

いや、そもそも、そんな事いつてる奴が一番バケモノみたいじゃないか。抹消するだつて？ 気がふれているんじゃないか？

そんなことよりも、僕が魔術師だつてことが彼にはばれてしまった。でも、彼は僕と同じ魔術師だ。

第一に、ケビンがあんなふうになるだなんて、想像してもいなかった。

どうして彼は「俺には誰もいない」といったのだろうか？

ケビンには、友達が沢山いる。少なくとも、一人ぼっちということとは、今の状況からして無いだろう。

それに、彼が最後に言い捨てた、「力のあるやつだけが生き残れる」という言葉も気になる。

……どうしよう。

取り返しのつかないことになった。

ケビンには、ついさっき、魔術師であることを外部に漏らしてはいけないと忠告されたけど、ジェシーにはもう話してしまった。

「俺だったら、抹消するを選ぶけどな……」彼の言葉が頭の中で蘇る。

だとしたら、僕は少なくともジェシーを守らなくちゃいけない。

「守らなくちゃいけない」だなんて、なんだか、ドラマみたいな格好付けのセリフに聞こえるけど、ジェシーは友達が少ない僕の唯一の親友だし、いざというときに助けなくちゃいけないのが、本当の友達ってもんだらう？

それにリップやウィルソン先生……。放課後、僕たちのちょっとした探検に関わってしまったがために皆殺しにされるなんて……

正直言って怖い。怖すぎる。ケビンのことだ。

何をしてくすかわからない。それもこれ全部僕のせいだ。僕がジェシーにあの神殿のことを話さなければ、こんなことにはならなかった！

よし、ここはリトルに相談しよう。なんてたって、あいつは僕のことを魔術師にしてしまった張本人だ。

その晩、僕は夜遅くに起きだして、トイレに引きこもった。もちろん、電気は消しておく。

リトルに電話をかけるためだ。

携帯の小さな画面から放つ光が僕の顔とトイレの天井を青白く照らし出した。

……今回はメールで打つより、直接電話をしたほうが言いと考えたのは、できるだけ早く話をつけたかったからだ。メールだと文章だけでやり取りしづらいし、途中で居眠りしてしまう危険性がある。リトルには申し訳ないけど、一番見つからないで済む方法は、これしか思い浮かばなかった。

『XXXXXXXXXX - XXX』

しばらく通信音が続いた後で、彼の声が聞こえた。

「リトル・ビニーだ。レンディか？　こんな夜遅くに一体何の用がある」

彼の声からして夜中に突然起こされたことにいらだっている様子だった。

僕はできるだけ手短に終わらせるために、簡単に謝った後、早速本題を取り上げた。

「あの……さ、ちょっと相談したいことがあるんだ」

「何だ」

「今日、友達に僕が魔術師だったことを教えちゃったん……」

「バカかお前は！」

受話器の向こう側から、外に音漏れするのではないかと思うほどの罵声か飛んできた。

思わず耳をふさぎたくなる音量だったが、僕は必死で耐えた。

「大体、お前は何故魔術のことが世間一般にバレたら危険なのか、わかっていないようだな」

うーっ！声がトゲトゲしてて、心に突き刺さる。

「そんなの知るわけ無いじゃない」

僕はぼそぼそと答えると、リトルはハアと盛大に溜息をついた。

「では、教えてやろう。　まず魔術というものはだな、使い手によってその価値が天と地ほど別れてしまう業なんだ」

「どんな風に？」

リトルは改まったせき払いをした。

「例えばだぞ？　お前が無理難題名ことを魔術の力に頼って無理矢理解決しようとするれば、その価値はたかが知れたものになる。

しかし、己が成長して、人のためになることだったら、その価値は計り知れないものになるだろう。

無論、我々は利益のためだけの魔術のことを”黒魔術”と定義している。

黒魔術には落とし穴が合つてな？

人間誰しもが心の奥底に潜んでいる欲求の悪魔に食われる危険性があるんだ。その危険性をさらに高めるのが黒魔術だ。それらの業を使うすべを知ってしまった時点で、常に危険がともなうことになる。最悪の場合は、死を招くこともある。

これらを回避するためには、ちゃんとした魔術修行をして、己の心を上手くコントロールできるようにしなければならない。心を操れる者こそが本当の魔術師だ。だから、一般人にはむやみに教えないほうがいい」

「でも、ジェシーは真面目だし、ちゃんと決められたことも守れるよ」

「しかし、そのジェシーとか言う奴の真の人間性については、本人しかわからないだろう？」

まるで僕がやったことはガキしかやらないようなことだといわれた気がして、僕は腹が立った。

しかし、リトル言っていることは正しかった。良く考えてみれば、確かにそのとおりである。

魔術の詳細点については、よくわからないけど、ジェシーには危険な橋を渡らせたくないし、そんな面倒なことに付き合うのは、彼女もごめんだろう。

僕はこれからどうしてたらいいのかわからなくなってきた。

「ね、魔術師であることがバレたら、そのバラした相手も魔術師にしないといけないの？　もしかして、抹消するとか……」

「確かにそうだ」

胸の奥がチクリといたんだ。

やっぱりジェシーはケビンに……？

「だが、私なら、そのどちらでもない方法を取ることができる」

「え？」

「フフフ。まあ見てろ。私にいい考えがある。だが、それを成功させるためには、レンディ。お前の協力が必要だ」

第二十九話・一番目の計画・

「おはよう！ レンディ、昨日のデートはどうだった？」

僕が教室に入った瞬間、ケビンはまるで昨日のことなど、無かったかのように調子よく話し掛けてきた。

僕はケビンの問いかけになど、答える気にもなれなかった。

だから、彼を無視しつつ、席につく。

そして、リュックから教科書とレポート用紙を出して宿題の続きをした。

「おい、なんとか答えたらどうなんだよ？」

「ケビンには関係ないだろ」

「は……？」

ケビンは、僕を上から下までにらみつけて、何様のつもりだ？とも言うように、舌打ちをした。

「てめえ、なめてんのかよ。え？」

「別にそんなつもり無いよ。それよりも……ねえ、ジェシー！」

僕はケビンを通り越して、後ろの席に座っているジェシーに話し掛けた。

すると彼女は、真っ黒のノートから顔を上げ、一体何事？ という顔をし、僕を見たあと、ケビンを見た。

「話があるんだ」

「何？」

僕は、前に立ちはだかっているケビンを押しやり、ジェシーの方へ歩み寄った。

そして、彼女の手を引きながら教室を出て行くとき、ケビンが「おい、みるよ！」 等と、皆のほうに何度も目配せをしながら僕とジェシーのことをからかった。

なんて、おせっかいな奴だ！

立て付けの悪い教室のドアを、勢いよくしめても、ケビンに煽られたクラスメイトの騒々しい声が聞こえてくる。

僕とジェシーで廊下を歩いていくとき、ジェシーは「追いかけるれないかしら？」 と、何度も心配そうに振り返っていたが、僕は、それにかまわず先に進んだ。

僕たちのいる、八年F組から十メートルほど離れた階段の一段下がったところに、僕とジェシーは腰をおろした。

「そんなに秘密にしたいことを話すの？」

僕はうつむいて、

「別に。ただ、ケビンがうるさかったから……」

と、言った後、ジェシーに向き直り、本題に入った。

「あのさ、今度ジェシーの家に遊びに言ってもいいかな？ ジェシ

「のお父さんとお母さんにお礼が言いたくて。この前のハロウインのことだよ」

僕達の目の前にある大きな窓から、曇り空の白い日差しが、ジェシーの髪を青白く照らしていた。

最初はなにがなんだかわからない表情をしていたジェシーだが、次第に事がわかった様子で、顔をほころばせた。

「ああ、あれね？ お礼なんていいのに！」

「うづん、そんなことないよ。たくさんご馳走してもらったんだし。それに……」

「ここから先のことは、本当は口にしたくなかった。しかし、

「それに？」

と、ジェシーに聞き返されたので、僕は言葉に迷ってしまった。

「……やっぱり、そのことは気にしないで」

僕がぼそりと答えると、ジェシーは肩をゆすってせがんできた。

「いいから！ それに、なんなの？ 友達同士なら隠し事はしないはずでしょ？」

僕は、ばつが悪くなって、思わず苦笑いした。

そして、しばらく考え込んだ後で、僕はジェシーにこう告げた。

「……ほら、もうすぐクリスマスじゃない。だからジェシーにプ

プレゼントを渡したくて」

するとジェシーは青い目を輝かせて、満面の笑みを浮かべた。

「本当に？ 嬉しいわ」

「えへへ、楽しみにしてて……それよりも、もう戻ったほうがいいかもしれない」

僕の言葉を聞いて、ジェシーは自分の腕時計に目をやった。

「あら、いけない。あと5分で先生が来るわ！」

僕は、ジェシーを先に行かせて、そのあとをつきタイミングをずらして教室に入った。

僕が適当についた嘘に、彼女は本当に嬉しそうに反応してくれていた。

あんなふうに言ってしまったからには、僕もちゃんとプレゼントを用意しないと、彼女をガツカリさせてしまうだろう。

それにしても、彼女は何が好みなのな。

僕なら本を買ってもらえれば、それで大満足だけど……でも、ジェシーもそうとは限らない。

第一、ジェシーは誕生日の日でも参考書を買ってもらっているよな女の子だ。

だから、本では僕もあの子の親と同じになってしまう。

女の子へのプレゼントか ……。

ここはクラスメイトに相談したほうがよさそうだ。

まず、女子の生態系に詳しくそうな、ジョーに聞いてみよう。

「僕だったら、シルバーのリングかな？ もちろん、名前も彫ってもらおうよ」

そんな高いの、僕には無理だ！ 結婚するわけじゃ有るまいし。

「俺は …… キスをプレゼントするよ」

そういったのは、クラスで一番キザなマックだ。

この臆病な僕には絶対に無理！ 第一に、そんなことしたらジェシーなんていわれるかわからない。 怖すぎる。

そして、そのとなりで

「歯ブラシは？」

といていたマーフィーは論外だ。

「やっぱりカードを渡すしかないのかなア……」

僕がそうあきらめかけていたとき、ふと、となりの席に座っていた女の子が、アドバイスをしてくれた。

「ねえ、手作りのものなんてどう？ 私がもらったとしたら、とても嬉しいと思うけどな」

そうか！ 手作りという手があった！ 僕は、なんでそんなに身近で、それも簡単なことに気づかなかったんだろう。

早速、何かを手作りしなくちゃ！

……でも、何を作れば良い？　僕が、何か作れるものなんてあつたっけか……

うーん……　　そうだ。　　編物なんてどうだろう。　　ベタだけど季節的にも合ってると思うし。

それに、昔よく母さんが僕に毛糸で編んだセーターや帽子を作ってくれていた。　　だから、母さんが編物に関連する何かを持っている。

家に着いてから、僕は母さんの使っているクローゼットの中をあさった。

クローゼットの中は思ったよりも整頓されていた。　　しかし、そこには、昔、親戚の結婚式の時に着た古いワンピースやブラウスがところ狭しと収納されている。

それらを、やっとの思いでかき分けていくと、棚の奥底に大き目のケーキの缶が眠っていた。

クローゼットの中に身を乗り出して、それをひっぱりだすと、同時に埃が舞い上がり、そのせいで僕はしばらく咳き込んだ。

ケーキ缶は、少なくとも二、三年は手をつけていないといった感じだ。

ベタベタと薄汚くなった缶のふたをあけると、中には、赤、オレンジ、青の毛糸と、何本かの編み棒、それと、黄ばみがかつた、子供用のニットの帽子を作るための説明書が入っていた。

赤い色の毛糸は一握りしかなく、オレンジと青の毛糸は、そこそこ残量がある。

女の子なら、きつと暖色系の色を好むだろう。

しかし、これではオレンジと青の毛糸を使うしかない。

きつと、大丈夫さ。　　ジェシーは青い色が、好きだし。

オレンジと青のしましま模様にしようかな。
……僕は、マフラーのデザインをあれこれ考えながら、編物のケ
ーキ缶を自分の部屋へ持っていった。

僕は、子供用ニット帽の作り方説明書を見ながら、基本的な編み
方を一つずつ覚えていった。

あーあ。こういうときに、母さんが教えてくれたら手っ取り早
いのだろうけど。

でも、編物をする理由をせまられたとき、なんて答えたら良い？
まさか、ジエシーのためにマフラーを編むんだ、なんて言えるわ
げがない。第一に、恥ずかしいじゃないか！

ここは一人で頑張るしかない……。

そう考えていたとき、「レンディー！」という女の姦しい叫び
声が聞こえてきた。

僕は、編物をそっとベットの土上へ置いて、一階のリビングに降り
ていった。

どうせ母の頼みごとに違いない。

リビングのドアを開けると、そこにはソファで雑誌を見ている
母の姿があった。

「猫はどうしたんだい？」

「あ……」

予想外の質問に、僕は拍子抜けした。

「まさか、まだあなたの部屋で飼っているんじゃないだろうね？」

母はそう言っつて、雑誌の影から目を光らせる。

何で今ごろになって猫の話題を持ち出して来るんだ！

今まで、ずっと母は猫のことを言っつてこなかった。だから、うっかり飼っつても良いものだと思っつていた。

「ごめん。……でも、ちゃんと世話はしてあるよ！ トイレだっつてしっつけたし、毛玉をはいたら毎回片付けている！ 猫の毛だっつてちゃんと取っつてるし……」

理由を並べていけばいくほど、声に力が入らなくなつた。本当は、全部嘘だ。

すると、母はことごとく、僕の言い分を踏み倒した。

「まあ、猫に対する思いやりは文句なしね。でも、母さんに対する思いやりはどうだい？ あたしは猫が大嫌いなんだよ！ 私が家にいる間は、ずっつとつきまっつて来るしね」

そつだ。そついえば、彼女は昼間の間はほとんど家にいるらしいが、僕が学校から帰っつてくると、すぐどこかへ遊びに行っつてしまふ。もしかして、嫌われているのかな……。

母さんは、一通り鬱憤をぶちまけた後、持っつていた雑誌をテーブルの上に叩きっつけ、キッチンへと姿を消した。どっつしよつ……母さんの目が血走っつていた。

そろそろあの猫をどっつにかしなれば、まづいことになりそつだ

……

第三十話・リトル・ビニーの特技・

僕は家からケケ（実は、この前猫に名前を付けた。モモとルシーとケケが候補だったけど、ジェシーがケケが良いと言ったから、それに決まった）を連れ出して、シルヴァニア公園へ向かった。第一にあんなにカッカしている母のそばにはいたくない。ジェシーからあずかった紺と緑のチェック柄をしたペットケースを木製のベンチの上において、そのとなりに僕が座り、マフラーの続きを編んだ。

ケケはどうしよう。このまま捨てるというワケにもいかないし。ジェシーに返すのも、なんだか気が引ける。

家で飼わなく、かつ捨てるというワケでもない方法はないものか。

そんなことを考えながらマフラーを編んでいたが、一向に良い考えが思いつかなかった。

しかも、何度も同じところで躓いていた。

時間が経てば経つほど、頭がイライラしてくる。

「あー！ できないよ、こんなの……！」

とうとう僕は勢い余って地面をかかとで蹴飛ばした。

しかし、衝撃が上手いこと骨に響いたので、地面にカウンターを食らってしまった。

だめだ。ずっと同じ事ばかりしていると、ストレスが溜まる。

気分転換にケケと遊ぼう。

「おい、でてこいよ」

ペットケースのふたを開け、中を覗き込むと、奥のほうで二つの目

がキラリと光った。

ケケは瞳孔をまん丸く開いて、僕の顔をじっとみつめている。

僕が舌でチツチと合図を送ると、いそいそとケケが飛び出してきた。しかし、そいつは、僕の腕に飛び込んでくるのかと思いきや、なんと僕の腕を飛び越えて、広場のほうへ駆け出していった！

「わ、ちょっと待てよ！」

そいつは、仔猫のクセに妙に足が早くてあっという間に追いつけなくなってしまうた。おまけに、植木のところまでいかれてしまい、あっという間に草の生い茂った影に隠れられてしまった。

残念なことに、広場の花壇は、まったくと言って良いほど、管理が行く届いていなく、植え込みに混じって雑草が　それも、たっくさん生えている。　皆、元々植えられていた花達の背丈を当に越しており、花壇とは、とても言いがたい。

その中に入っていくのは、流石に気が引けた。

しかし、ここで逃がしてしまつたらジェシーにあわせる顔が無い。仕方が無いので、僕はしぶしぶと雑草の生い茂る植え込みの中に入つていった。

長い靴下を履いているといえども、雑草がチクチクと刺さつてくすぐったい。

気づいたら、黒い靴下が枯草だらけになっていたので、時々手で払いながら、進んだ。

「おーい！　まったく、どこに行ってしまったんだ」

僕は、時々ケケの声真似をしたりしてみたが、一向にケケは姿をあらわさない。

次第にやつれてきて、よれよれになりながら猫を探すようになった。とうとう上からケケを探すことを断念し、ケケと同じ視線で探すべく背を低くして草の隙間を伸び着込んでいると、背後から用務員らしき人間の声が聞こえてきた。

「おい、そこで何をしている」

僕はつい、起こられるものだと思い、ヒイ!と声を上げて立ち上がり、植え込みから降りた。

そして、ふと振り返ると、そこには、やはり用務員がいた。茶色いコートを着てた、ニメートル近い身長のこと……

「リトル・ビニー!」

それは、確かにリトル・ビニー本人であった。

僕が叫んだのは裏腹に、リトルはやはり冷静だった。

「奇遇だな」

「お願いだよ! さっき、友達から預かっている猫を逃がしちゃったんだ。それで……」

僕は、これ以上言わなくても、彼に言いたいことが伝わると思ったが、彼の反応は無かった。

「……それで、そう。一緒に探してほしいんだ」

すると、リトルはしばらく黙り込んだ後、鼻で溜息をつき、こう言った。

「何故、私がお前に付き合わねばならないのだ」

彼はその一言で僕を一蹴した。冷たいにも程がある！
続いて、彼はさらに説教を付け加えた。

「猫くらい自分で探せるだろう？ それに、人と会っていきなり物を頼むとは失礼にも程があるぞ」

僕は、返す言葉が見つからなかったので、しばらく黙りこくった後、彼の言葉に了解を仄めかした。

「……わかったよ。じゃあ、ひとりで探すから」

僕は彼にそう言い捨て、渋々と花壇へ引き返していった。
リトルはいつものまにか僕の座っていたベンチに座り込み、新聞を広げて記事を読み始めている。

僕は、一所懸命にケケを探したが、リトルはそれには目もくれず、何かと楽しそうに触れ合っている。どうせ、野良猫か何かだろう。その間にも、僕はケケを探しつづけたが、一向にケケが見つかることは無かった。

「ねえ、リトルも一緒に探してよ！」

「だから、私は探す必要が無いといっているだろうが」

僕は悪態を着いて、リトルの方へ目をやると、なんとそこには、今まさに探していたケケの姿が。それも、気持ち良さそうに抱かれていますではないか……！

「ねえ、ちょっと！ それは、僕の猫じゃないか」

「目の付け所を変えないからだ」

そう言つて、リトルは鼻で笑つた。このクソオヤジが！

僕は怒りを静めるために一呼吸した後、リトルの隣に嫌々座つて編物の続きをやりはじめた。

無言で何目編んだのか確認していると、左側からじつと見られるような視線を感じた。

何かと思い、チラッと目を向けると、どうやら、リトルが物言いたげに様子でこちらを見ているようだった。

「……………何？」

すると、リトルはビクついて、一瞬僕から視線をそらした後、鼻で溜息をついた。

「いや。……………ただ、編み方が……………ええーい、貸してみる、レンデイ」

彼の腕がぬつと僕の前に現れる。

「ちよー！」

待つてという間も無く、リトルは僕の手の中から網掛けのマフラーを奪い取つた。

そして、今まで一所懸命に編み上げてきたマフラーを片っ端から解いてしまった。

僕の編んできたマフラーは、あつという間にただの毛糸の山になった。

「勿体無いな！　なんてことするんだよ！」

すると、リトルは僕に向かって、自慢げな様子でにやっついてきた。

「私が編み方を教えてやるのではないか」

第三十一話・リトル・ビニーの特技2・

リトルはそう言って、僕から編み棒を奪い取った。

「いいか？　まずは、こうやって持つんだ。　やってみる」

「え……「こう？」」

さっき、リトルが握って見せた、手の形を真似ようとする。

「違う違う！　まったく、お前は頭が悪いな」

そして、再び、リトルは僕から編み棒をふんだくった。

「うるさいな……」

僕が小さな声で悪態を着くと、リトルは僕を小ばかにするような態度で言い返した。

「どうせ、お前ごときの知能では編物もろくにできまい。　私なんて、普段からロープを編んで、鍛えているほどだ。　フフ、ジェシーへのプレゼントはどうする」

……糞っ、むかつく……ッ！

「わかったよ。　やればいいんでしょ？　やればさー」

ロープを編んでいる、だなんて、どういうことだ？　握力がつい

て、早くなるのかなあ。
あれ？ ちよつと待て。

「ねえ、今なんて言った？」

すると、リトルは気まずいことを聞かれてしまったかのように、目を細めた。

「言ってたじゃない。 ジェシーがどうって」

「ふん。 それは、私が未来人だからだ。 お前がこれからしようとしている行動などすべて計算済みよ」

「じゃあ、どうやって調べたんだよ？」

リトルは、僕から目をそらした。

「お前に教えることじゃない。 さ、続きを編むのか？ 編まないのか？」

僕は、いまいち納得がいかない。

「わかった。 編むよ。 だから続きを教えて」

そのあと、しばらくは、リトルから基礎をみっちり叩き込まれることになった。

やっとのこと本題に入れたのは、その三十分後のこと。 僕は疲れてやる気がほとんどなくなっている。

でも、リトルが丁寧に一から十まで教えてくれたことが、かえって良かった。

僕は、ほとんど間違えることなく、ジェシーのマフラーを編むことが出来るようになったからだ。

それにしても、どうしてリトルはジェシーのことを知っていたんだろう？

もしかして、僕を魔術師にするために、いろんなことを下調べしていたとか？

ヒヤー！ 怖い。だとしたら、きつと僕が今まで”ピー”したことや、”ピー”しちゃったことまで知られているんだ。そうに違いない！

「ま、せいぜい頑張るんだな」

一通り教わった後、リトルはそう言って、僕から少し離れた。

「……………ありがとう」

ありがとう、だなんて心の底から言えることじゃない。さんざん嫌な目にあわせておいて……………！

しばらく編んでいると、不意に彼が立ち上がった。

「さて、私はそろそろ帰るとしよう。レンディ。こついつところには、決まってカラスが寝に来るからな。早く帰るんだぞ」

彼はそう言って、帽子をかぶりなおし、帰る仕度をする。

僕は、編むことに熱中しながら

「わかってる」

と、答えた。そして、一瞬の沈黙　……しかし、それを先に破ったのは、リトルだった。

「おい、レンディ」

「何？」

「真実というものはだな、実に信じがたいのだよ。　ことが上手くいかないのは、お前が自らの過ちに気づいていないからかもしれないぞ」

彼は、そう言い残して、僕の前から立ち去った。

……自らの過ち？　僕が何かしたって言うの？

僕は、マフラーを編みながら、今まで何か失敗していることが無いか、思い出せる限りのことを思い出してみた。　しかし、何も思い当たる点が無い。　一体、何が問題なんだ。

僕は、この先に待ち受ける最悪の事態につながる要因が……まさか、すぐそばにることなんて知らずに、後の時間をすごした。

第三十二話・二つの切欠

気づくと、時計の針は5時を指していた。

やはり、猫は連れて帰るしかない。ここに置いていくというわけにもいかないし。

そろそろ 猫をどうにかしないと、とは思っているものの、なかなかことを発展させられない自分がもどかしかった。 親にばれないよう、ジェシーと同じようにクローゼットの中で飼うしかないのか？

ああ、二度も三度も嘘をつくのは流石に疲れるな。

家に近づくにつれ、足取りが重くなっていた。できれば、このまま誰かの家に泊まりたい。 いや……？

そうだ！ 何も、”誰かの家” で、育てなくちゃいけないという決まりは無い。 それなら、いい場所が有る！

僕は、早速、ジェシーの携帯電話に電話をかけた。

”トゥルルル”

「……もしもし？」

「レンディ？」

「うん、そう。 あのさ、思いついたことがあるんだ」

「何を？」

「この前、ジェシーから預かった猫のことなんだけど、シルヴァニア公園で飼うって言うのはどうかな？」

「それ、いいアイデア！」

ジェシーが歓喜の声を上げた。

「でね、あそこなら誰にも気づかれないと思うし、僕の家からそう遠くないから、面倒も見れると思うんだ」

「すごいわ、レンディ。私でも思いつかなかった。わかったわ。じゃあ、私も堂々と猫を見に行けるってことね」

「そうだよ」と、僕が言いかけたとき、ジェシーが口を挟んだ。

「あ、そうそう！ この前、大道芸サークルのプロデューサーをしている親戚のおじさんが、オックスフォードに来て芸を披露するから、是非見においでっていったの！ だから、レンディも一緒にこない？」

「大道芸?! ……僕、そんなの初めてだよ」

「それならなおさらよ。とつても面白いんだから！」

僕はジェシーに押されて、ジェシーの親戚であるおじさんがプロデューサーをしているという、大道芸を見に行くことになった。

大道芸というのは、街角なんかでフリーパフォーマンスを見せることだ。フリーパフォーマンスとは、主に玉乗りや人形劇、ジャグリングなどのことを言う。

僕は、テレビでやっているところは見たことがあるけど、生で見
たことは一度も無い。
とっても楽しみ！

- 次の日 -

今日も、何故かケ빈は休んでいた。
事情は先生が知っているらしいが、なかなか教えてくれない。
僕は、何だろうと思いつつ、いつもケ빈と一緒にいるリップに
話し掛けたが、彼もわからないといって首を振るばかりだった。

「午後の二時から始まるそうよ。一緒に行かない？」

4時間目の授業が終わった時、ジェシーが僕の机のところへ来て、
話し掛けてきた。

「え、僕、一人で行けるよ」

今日は、嬉しいことに、午前中だけで授業がお終いだ。

「私についてきてくれるんなら、道を教えるわよ？」

「そ、そんな……」

結局、僕はジェシーについていくことになった。嫌だ。
だって、恥ずかしいじゃないか！ 女の子と二人で街中を歩くな
んで、絶対にデートしてると思われる！

……それに、ジェシーは、頭が良いから、きっと僕は彼女の手の
中で思い通りに動かされているんだ。でも、それって……？

ふと、まさかの妄想が頭の中に現れた。

ジェシーはきつと、僕のことを、好きで、一時も多く僕と一緒にいたいって考えている。

だから、ついてこないと道を教ええないだなんて言う、断りよ様の無い条件を押し付けてきたんだ。そうに違いない。

……って、そんなハズないか。ははっ、まさか！

だって、あの時、ジェシーは言っていたじゃないか。「私達、ただの友達よ」って！ それなら、何もためらうことなんて無い。そうだよ。

この先も、きつと友達のまままで、いられる。そうじゃなかったら、僕はどうすれば……

「お昼は、食べに行くの？ それとも、お弁当？」

僕は、帰り際に、気になっていたことをジェシーに問い掛けた。

「私はお弁当を持ってきているわ」

「そっか。 どうしよう。僕は、外食にするつもりだったから……」

ああ！ こういうときは、どうすればいいんだろう？

僕が、もじもじしながら手いじりしていると、ジェシーが「それなら……」と、切り出してきた。

「私のお弁当をわけてあげる。それで良いでしょ？」

「え、ジェシーの？ いいよ、そんな！」

だが、ジェシーは僕が遠慮しているにも関わらず、「いいから」

と行って、弁当の入った包みを僕の机の上に持ってきた。

クラスの皆は、既に帰り始めていて、教室の中に残っている人は、まばらになっている。

すると、担任の先生が教室に入ってくるなり、早く生徒を外に出るようにと、促した。

そして、僕達も、その流れに乗って、教室の外に追い出された。

これからどうするとかと思いきや、ジェシーはこんなことを言った。

「中庭で食べましょうよ」

「中庭で？」

「そ。あそこなら、いても大丈夫よ。すぐ外に出られるしね」

僕は、彼女の言った言葉に戸惑いを覚えながらも、結局、学校の中庭に連れてこられてしまった。

嬉しいけど……でも、ちょっと恥ずかしい。誰かに見られたら、勘違いされそう。

学校の中庭は、この字型の校舎に囲まれており、2、3階の北側校舎と南側校舎をつなぐ、渡り廊下の柱が立ち並んでいるところを抜ければ、敷地の外に出られるようになっていいる。

中庭は、近くにあるブレナム宮殿のウォーターガーデンを意識して作られていた。だが、規模は、かなり小さい。

真中に噴水の出る池と、百日紅の木が一本植えられており、それを取り囲むように校舎を背にした、白いベンチが三つ置かれている。ベンチの背後には、深緑色の生垣があり、一階からは、中庭の様

子がわからない。

僕達は、渡り廊下側の正反対である、一番奥のベンチに腰掛けた。背後は、柵を越えればすぐに鬱蒼とした森が広がっている。

徐に、ジェシーがお弁当の包みを開いている間、僕は、そわそわしながら辺りを見回した。

「サンドウィッチが三つしかないわ」

と、ジェシーが独り言をつぶやいたとき、彼女は僕の様子のおかしさに気づいて、「どうしたの？」と、問い掛けてきた。

「さつきから、キョロキョロしてるけど……」

「いや、なんでもないよ」

僕は、いつもの愛想笑いで返したが、ジェシーはそう、と軽く受け流しただけだった。

彼女は、変なところで僕を困らせる。いつもなら、「どうして？」「何で？」と、質問してくるはずなのに。

あー！ こんなところを誰かに見られたら、大変なことになる！特にケビンには見られたくない。奴は、この前もそうだったけど、ジェシーと僕が仲良くしているところに漬け込んで、やたらとからかってくる。でも、今日は嬉しいことに彼は休んでいる。

しかし、二人で一つずつサンドウィッチを食べて、（僕の食べたサンドウィッチは、豆入りのポテトサラダだった）、最後のチョコレートサンドを二つに分けて食べ終わる頃になっても、誰かに見ら

れているような様子は無かった。僕は、サンドウィッチを食べている間、ずっと胃の中のものが逆戻りしそうな気分を味わっていたが、結局、最後まで、何かが起こることはなかった。

無事に昼食が終わって、僕はほっと胸をなでおろした。

第三十三話・ウーネ・オズ・クラブス・

その後、僕たちはリュックを背負って駅前の広場まで行った。

駅は、学校から歩いて40分ほどのところであり、その前に大きくひらけた広場がある。広場の真中には、有名な歴史人物の銅像が立っていた。

広場の一角を取り囲むように人だかりが出来て、にぎわっている。どうやら、あそこで大道芸が行われているようである。

人だかりから、少しはなれたところで、うさぎや犬のような格好をしたクラウン達がチラシを配っていた。僕が、ジエシーと一緒にちらしを配っているクラウンに近寄ると、うさぎの方のクラウンが威勢良く話し掛けてきた。

「やあやあ、お嬢さんにお坊ちゃん！ ウーネ・オズ・クラブスは初めてかい？」

これ以上は、どうにもならないほど、頬を吊り上げて笑いかけてくる。

あまりに圧倒されるクラウンの雰囲気戸惑いながら、僕はこくりとうなずいた。すると、

「そうかい、そうかい！ じゃあ最後まで見ていってくれよ」

犬の方のクラウンが、めいっばいにウィンクして、チラシを二枚手渡してきた。

呆然と渡されたチラシに見入っていると、あることに気づいた。

「ジエシー……これ……」

僕はチラシに指を当てて、チラシの内容をつかかった。

「貴方が、わからないのも無理ないわね」

そう言って、ジェシーは僕のチラシを覗き込んだ。

「これは、彼等の言葉でかかっているの。

まず、”woone”。これは、”world”を意味して、次の”os”は”of”、そして最後の”craps”は”circle”ということなのよ」

「つまりは、”world of circle”ってこと？」

と、怪訝な表情で話し掛けると、

「そ！ 彼等のファンクラブなら、誰でも知っていることだけだね
！」

つと、ジェシーは茶目つ気たつぷりに舌を突き出してウィンクした。
ここだけの話ってことのようなのだ。

そして、僕は、ジェシーに手を引っ張られ、人ごみの中へと連れてゆかれた。

前列は、比較的年齢層の低い、プライマリーやそれ以下の子供達で埋め尽くされていた。そして、そのすぐ後ろでは、保護者らしき人ばかりがべちゃくちゃしゃべっている。

僕達は、その隙間から大道芸人たちを見ることにした。

「まずは、中国雑技の、リー、スミン、ミヨンホ！」

司会の男が、マイクをとり、盛大に会場を盛り上げた。すると、どこからとも無く、三人のアジア系女性達が現れ、にこやかな表情で観客達に挨拶をした。

使い慣れなさそうな言葉遣いで、一通り自己紹介し終わると、彼女達は、ステージの脇にあつた、茶色い皮製のトランクの中から、五十センチくらいの棒を取り出した。十本くらいはあるだろう。

一人の女がそれをすべて担ぎ上げ、中に放り投げたかと思うと、なんとそれらの棒は一本の長い棒に変わった！

後から取り出した、棒のまともりも、同じような中で一本の長い棒になり、二本の長い棒がそろつた。

それを、二人の女達が一本ずつとりわけ、地面に突き刺した。棒と棒の間隔は、だいたい一メートルくらいである。

二人の女は、もう片方の手で縄跳びのような紐をついになつて持ち、その縄の上に今まで待機していた女が飛び乗る。

女はロープ一本の上で、何度もアクロバツクなアクションをすると、勢いをつけるために、身を低く保つた。

「何をするのかしら」

ジエシーが、ワクワクしながら女達を見つめている。

どうやら、これから大技がはじまるようだ。

僕は、唾を飲んで、女達を見守つた。

他の観客達も、女等に見入っている。

女は、腕をぶんと後ろに振つて、今までの中で一番低い体勢を作ると、まるで縮められたバネが跳躍することく、一の字の体勢を作りながら一気に棒の天辺まで昇りつめた。

ゆっくりと、しかし正確に着地すると、女の片足と棒が今にも崩れそうな積み木のような危なっかしくゆれ始めた。

観客達は皆、息を呑んで静まり返っている。

僕は、コレが演技だとわかっていたにもかかわらず、緊張して女達から目が離せなかった。

しばらくして、ゆれが収まると、棒を支えている二人の女が縄跳びを放り投げ、支えていた棒を持ち上げた。

少しずつ、下のほうへと手を滑らせると、二人とも手のひらに棒を乗せた。

徐々に二本の棒が寄り合っていく。

足を広げて棒の上に立っている女は、徐々に足の幅を狭めていき、二本の棒の上に気をつけのポーズで立った。

そして、両足とも一本の棒の上に載せると、ブリッジをして、足の乗っていない方の棒に左手を置いた。

棒と棒のすきまは、十五センチにまで縮められている。あんなところでバランスを保つなんて神業だ。

ブリッジをした女は、下のほうで支えている女によって、少しずつ回転し始めた。下で支えている女は、互いの後を追いかけるようにして、輪を描きながら走り回っている。

だんだんスピードがついてゆくにしがって、女の髪が、振りの乱され、コマのように早く回転するようになる。

「すごい！」

僕がついそう叫んだ頃には、会場は大賑わいだった。

回転が止まると、女は手だけで棒の上に逆立ちをし、ぼんと飛びのいて空中で一回転から地面に着地した。

すると、同時に完成と盛大な拍手が舞い上がった。
女達は、にこやかに観客達に向かって手を振ると、テントの中へ消えていった。

司会の男は、マイクを手に取り、盛大に声を上げた。

「お次は、天才腹話術師、オッズとカウル……！」

第三十四話・ウーネ・オズ・クラブス2 -

舞台袖から（と、言っても広場に特設されたテントの中からだ）出てきたのは、市松模様の角張ったシルクハットをかぶって、黒いマントを着た細い身形の男だった。

男は、会場の中心にでかかったところで、ある異変に気づいたらしく、さっと後ろ振り返る。

僕は、何かかと思つて、男の振り返った方を見た。

トランクが動いている。

……きつと、中に何かが入っているんだ！僕は、ドキドキしながら、マントの男を見守った。

男は、慌ててトランクを開け、中から赤い塊を取り出す。かなり大きい。

それを、よいこらせと、担ぎ上げると威風堂々と会場に戻ってきた。男は、会場の中心にきたところで、観客に向かい、深々と一礼する。

その瞬間、男の担いできた赤い塊の正体がわかった。

ずるりと、男の肩から滑り降りてきたのは、全長六十センチほどの小鬼だった。そいつは、男の左腕になんなくおさまり、その状態でコントがはじまった。

「やあ！ おいらは、カウル！ 夢の国から来たんだい！」

「はじめまして、ワタクシ、オッズ・リボリアンというもので……」

まさか。その、まさかだ。

術者と人形が同時に喋るなんて……！

小鬼のやんちゃな声に比べて、男は透き通って、丸みのある声だった。

すると、男は、子鬼の口を手でぱつと抑えた。

「おっと、君は私の次に喋ると決められているだろう?」

「ごめんっちゃ! つい、おいらが先に喋るもんだと……」

小鬼が男の手を振り切って答えると、男は困ったように首をふった。

「まったく、これだから。 上司と平社員の上下関係は絶対、ぜえーったいなんだからな?」

この調子で彼等のコントは続いた。

その後は、二人が同時に喋るというようなことは無かった。

「どうやら、”あの”奇跡は最初だけに用意されたお楽しみだったらしい。」

それにしても、本当に腹話術が上手い! おそらく、何十年も修行を積んでいるのだろう。

人形の動きがリアルで、まるで生きている人形と会話しているように見える。

間の取り方や、身振り素振りまで完璧だ。

しかし、僕には最初の奇跡のタネがどうしても解き明かせなかった。あの男は、どうして二人分の声を操れるのだろうか?

ホーミーみたいに同時に違う音程で声を出すのとはワケが違う。

僕等が、彼等の芸に夢中で見入っていた頃、何処からともなく、一羽のカラスが会場のすみにある木から、下りてきた。 そう、会場が盛り上がっていたのも、つかの間。

そいつは、僕の目の前をかすめて飛んでいったのかと思うと、まもなく何十羽というカラスが木の中から出陣してきた!

ガアガアと言う鳴き声が、広場中を行き交い、まるでヒッチコックの映画でも見ているかのような光景が目の前に広がっている。

そのとたん、ジェシーは悲鳴をあげた。

僕は、カラスを追っ払おうとしたが、カラスも負けじとよって集って、攻撃してくる。

痛くは無かったが、飛び掛ってくるカラスに視界をさえぎられるのと、周りを取り囲まれる圧迫感で気が気ではなかった。

方々から髪の毛を引つ張ったり、肩や頭につかまったり……仕舞いには、周囲の人々から哀れみの目で見られる始末だ。

怖い怖い、怖いよ！ 誰か、このカラスを取っ払ってくれ！

……そう思った瞬間、とある人物が僕の目にとまった。

真っ黒いマントを着た、不思議な帽子の……そう、さっきまで芸をしていたオッズ・リボリアンだ。

彼は、啞然とした様子で僕を眺めている。一体どうしたことが、と言ったところだ。彼も、他の客と同じように、ただ僕を見ているだけなのか……？ いや、次の瞬間、彼はぶつぶつと何かを口走った。

僕からでは、カラスの鳴き声で彼の声がかき消され、口の動きしか捉えられなかったが、彼が唱えている何かの呪唱マジックのおかげで、カラスたちの動きが次第におとなしくなっていく。

……ありがたい！ これで僕は、カラスたちの災難から切り抜けられる。

でも、どうしてカラスたちは逃げ去っていったのかな？ 不思議だ

……一体、何をしべっていたのかわからなかったけど……あとでお礼を言わなくちゃ！

オッズは、呪唱を唱え終わると、即座にテントの中へ戻っていった。何かを打ち合わせするのだろうか……

僕がそう思った頃には、ほとんどのカラスたちが会場からいなくなっていた。

会場のあちらこちらには、黒い羽が散乱している。

すると、好奇心旺盛な子供が、それを拾い上げて、もて遊んだ。

難は過ぎ去った……子供だって安心しているじゃないか。

しかし次の瞬間、僕の心の中には、なんともいえない怒りのような感情がこみ上げてきた。

何なんだ……これは。まるで、カラスの羽に触られるのが、プライバシーを汚されるのと同じであるかのような……

「どうしたの？ レンディ。怖い顔して」

心配そうなジェシーの声によって、僕は我に帰った。

しかし、さっきの子供に目が行くことは抑えられない。

すると、今度は、子供が僕の視線に気が付いて、動きを止めた。

そして、泣きそうな顔を見せる……。まずい、泣いてはだめだ！するとそこへ、その子の母親らしき女がやってきた。

「コラ！ カラスの羽なんか拾っちゃいけません！」

「ママ……だって、あのお兄ちゃんが……」

え、僕？

「いいから、さっさと捨てるの！」

「……はあーい」

よかった！ ありがたいことに、母親は僕の存在には気づいていな

いらしく、そのまま子供をつれて立ち去った。

僕は、胸をなでおろしたものの、混乱している会場の雰囲気になんか飲まれて、どうしたらいいのかわからなくなってしまった。とりあえず、その場でことが動くのを待つ。

すると、さっきまでテントの中へ消えていたオッズが会場に舞い戻り、どよめいている観客達に向かって、大声で呼びかけた。

「みなさん！ 多大なご迷惑をおかけしたことに、真に申し訳ございませんでした。 ですが、今は、パフォーマンスのうち！ 万が一、怪我をしてしまった人がいましたら、手を上げてください？」

一瞬、静かになったかと思うと、会場に集まった人々は、次々と野次を飛ばしたり、ざわざわと何かを話し合ったりした。

しかし、怪我をしましたが、手を上げる者は一人もいなかった。

あんなパフォーマンス……すごいけど……でもやっぱり、僕にはいまいち納得がいかなかった。

よくカラスに襲われる体質だから、あたりまえなんだろうけど……

その後も、すんなりとパフォーマンスは続いた。しかし、オッズの腹話術は、その後、二分ほどで幕を閉じてしまった。

続いて出てきたのは、「フェザーマン」という、輝かしいばかりの黄緑色をした羽をまとった、サングラスの男だった。

そいつは、スパイダーマンにも負けず劣らずのビックパフォーマンスで会場を興奮の渦に巻き込んだ。

まるで、さっきまでの出来事が嘘だったかのように！

それにしても、彼の芸には目をみはるものがある。

次々と、アクロバティックなパフォーマンスを繰り出したり、屋根から屋根へと飛びわたったり。

最後に彼は、「永久不滅のスタントマンです！」と行って、去って

いった。

次は、クラウン二人組みの出番だった。

このクラウンたちは、最初、僕等がこの公園にきたとき、チラシを配っていた人たちだ。名前は、犬の方がビリーでうさぎの方がリヴリーというらしい。

二人のクラウンは、奇妙な音楽にあわせて、踊りながら会場に出てきた。

次から次へと繰り出す、ジャグリングや玉乗りといった、芸をしなから、無言の劇を織り交ぜる。

そのあまりもの滑稽さに、会場中は大爆笑！　どうやら、このクラウンたちは大道芸の目玉らしい。

ビリーとリヴリーの芸が終わった後でも、たくさんのファンコールがかかっていた。

続いて出てきたのは、体中に太鼓やドラム、木琴にギターといったさまざまな楽器を背負ったワンマンバンドと呼ばれる一人合奏だった。手にはアコーディオンを持っている。

彼の名前は、ジェームズ。彼は一番最初、メロディーに乗せて挨拶をした。

簡単に自己紹介し終わると、”小さな世界”や”グリーンスリーブス”といった、童謡から最近のポップスの曲まで、実にさまざまな曲を演奏し始めた。

あれだけの楽器を一度にどうやって演奏しているのか、知りたいところだ。

だが、いくら目を凝らしても、神業としか思えなかった。

会場の人々は、彼の指示により、演奏する曲に合わせて、手拍子したり、歌ったりして盛り上がった。

大道芸のこのワンマンバンドをおおとりにして幕を閉じた。
観客の何人かは帰ってしまった。しかし、終わってもなお、会場がざわついている。

すると、一人の男の叫び声を引き金に、会場中にアンコールがかかった。

しばらくアンコールがかかっていると、再び音楽が鳴り始め、会場が生き返ったかのように盛り上がった。

歓声と共に、中国雑技の女達や、フェザーマン、オッズとカウルにワンマンバンドのジエームやクラウン二人組みが出てくる。

皆、それぞれが会場にまわって握手をしていくと、司会の男が出てきて、言葉を添えて去っていった。

「会場のみなさん！ 今日ありがとうございます！ また今度お会いする機会まで！」

第三十五話・賢いネコ・

あたりは既に暗くなり始めていた。かなり寒い上に、霧も出始めている。

僕はジェシーに、「トイレに行ってくる」といって、オッズを探しに出た。

会場に戻ると、スタッフ達がテントを片付けている最中だった。

僕は指示を出しているスタッフの一人に話し掛ける。

「骨は全部まとめ……指を挟まないように」

「あの、すみません」

「……わかった。じゃああとでF2出しておきますんで」

しかし、そのスタッフには聞こえていないようだ。僕はもう一度、大きな声でスタッフに話し掛けた。

「あの!!! すみません」

すると、スタッフはイライラした様子で振り向いた。

「ん、なんだ」

「オッズさんはまだここにいますか?」

「芸人達はもういないよ」

「え！ あの、どうしてもあえないんですか？」

僕は引き下がらず、男に挑んだ。しかし、男は、

「いないといったらいない！ さっさと失せる！」

と、いつて僕を一蹴した。

しぶしぶジェシーのところへ戻っていくと、彼女は心配そうな面持ちで、僕に話し掛けてきた。

「……何か有ったの？」

僕はそっぽをむいて、

「別に」

といった。

思い通りにならないのが、悔しい。

その後、僕はジェシーをつれて会場を後にした。

行く当てもなく町の中をほつき歩いている間、僕と彼女の間には沈黙が流れていた。

しかし、二人で喫茶店に入ったとき、ジェシーはその沈黙を取り払うようにして、僕に話し掛けた。

「ねえ、レンディ？ この前、貴方に渡した猫のことだけど……覚えている？」

「ああ、あのケケのこと？」

「そう。二人でシルヴァニア公園で育てる計画、はじめましょう？」
そうか。僕は、大道芸のことで、猫のことをすっかり忘れていた。
それもそうだ、気分転換にはいいかもしれない。

「わかったよ。でもまず、僕の家で猫の安否を確かめなくちゃ」

幸いなことに、猫は無事だった。

僕は母に見つからないように、さっさと家を出て、ジェシーの元へ
駆け出した。

ジェシーと二人でシルヴァニア公園に行くのは、はじめてだ。

彼女は最初、「ほんとうにこんなところで平気だったの？ もっと
別の場所を探したほうが……」などと質問してきたが、他にいける
場所はないと説き伏せた。

今更になって、別の場所を探すのも、なんだか、面倒だし。

僕は、話題を変えて、猫の世話をする分担についてを話しはじめた。

「それなら、一日おきに、私かレンディのどっちかが、猫の世話を
するっていうのはどう？」

「そうだね。じゃあ、僕が先に猫の世話をするよ！」

僕は、緑と紺色のチェック柄のかごをあけて、ケケをひっぱりだし
た。

あらかじめ用意しておいた、ケーキの箱を改造したケケ専用の部屋
に、ケケを入れる。

それを、植え込みの奥にそつと隠すようにして、置いた。

遠くからなら、見ようとしたって背の高い雑草が邪魔して見られないし、花壇の奥のほうだから容易に人が近づける場所でもない。(ぶつちやけた話、入るのにとても苦労した)

僕とジェシーで考え出した案だ。ほとんどはジェシーが考えたことだけだ。

不意に、彼女が話し掛けてきた。

「ところで、キャットフードはまだある？」

ジェシーは以前、僕に猫を渡す際に、一キロもキャットフードを渡してくれた。

しかし、あれはかたいタイプのもので、子猫には向かない。

「あれは……そう。子猫には向かないんだよ」

「どうして？」

ジェシーはいぶかしげな表情を見せる。

「硬い奴じゃ、噛み切れないんだ」

その後、僕はすこし思考を巡らせた。

僕は、はじめて家に猫を連れてきたとき、パンを牛乳に漬したものをあたえた。

しかし、あれは最初のうちだけだった。

むやみに牛乳のませると、大概の猫はおなかを壊してしまう。

だから僕は、ケケに缶詰のえさを与えていた。

「そつだ。缶詰がいいよ。あれなら、ゴミも出ないし、腐らない」

「なら、今度、私が買ってくる！あのキャットフードが無駄になっちゃったことは残念だけど……。でも、それで今度からは失敗しないようにできたでしょ？」

ジエシーは困ったような笑顔をみせた。

僕もつられて、微笑みかける。どんまいって、具合に。

猫に関する作業が終わってからは、二人とも慌てて家路についた。もう七時だ。慌てている中で、うしろに人の気配を感じたけど、もうそんなの気にしていられなかった。

第三十六話・死の発覚・

「まったく、最近遅いわよ?」 ほら、やっぱり。

今日も母にしかられた。早く帰らなきゃいけないって言う思考はあるよ?」

でも、どうしてもそのとおりに行かないってのが、人生ってもんだ。

そんなことを言っている僕だけど、リトルとの約束は絶対に守らなくちゃいけない。

どうしてか。あの日約束したんだ。というか、おどされた。

何が何でもこの計画を成功させなければ、僕の命が無かってね。

あの人は、僕を脅してばかりで、一体何をたくらんでいるのか、わかったもんじゃない。

でも、約束を守らなかつたら、ジェシーが危ないってのは、わかっている。

だから僕は、あのリトルに従わざるを得なかつた……。

次の日、僕はとんでもないことを知ってしまった。

今日は何故かいつもよりずっと早く目が覚めたおかげで、いつも一番乗りで学校に来るジャッキーの次に早く着いてしまった。

ジャッキーはおしゃべりな女の子だ。

しかし、僕はジェシー以外の女の子に接したことがほとんど無い。不運なことに、僕は、ジャッキーとしばらく二人きりで過ごす羽目になった。

「おはよう……じ、ジャッキー」

すると、ジャッキーは珍しくジェシー以外に話し掛けた僕を不思議な視線で見つめた。

「お、おはよう?」

しまった。ジャッキーはおしゃべりだ。しかし、女の子と二人きりなんて、気まずすぎる!

まともに何かを話す気になれない! まだ五分しか経っていないけど、僕は何万年も教室にいたような気がして、あやうく、カチコチの化石になるところだった!

だが、ジャッキーが他のクラスのところへ言ってくれたおかげで、僕はほっと息をつくことが出来た。

金色の朝日が教室を照らす中、しばらくひとりで本を読んでいると、不意に立て付けの悪い教室のドアが開かれた。珍しく、リップがひとりで教室に入ってきた。

「あ、おはよう。リップ」

すると、リップは僕をちらとだけ見た。そして、気がすすまない声で「ああ」といい、席に座る。

それからは、時計の音だけが聞こえ、一秒一秒が耳につくほど感じる中、何を話そうかとリップは話題を考えているようだった。

僕が何だろうと、リップの様子をうかがいながら本を読んでいると、不意にリップが大きな溜息をついた。

「ハアア、なあレンディ、聞いてくれよ」

きつと独り善がりなグチだ。僕は本を読みながら答えた。

「うん、何?」

「最近、ケビンの様子がおかしいんだ」

ほら、きた。 ケビンのことだから。

「あいつは、いつもひとりで何かぶつぶついつてやがる。もしかしたら、精神病にでもかかったんじゃないかって」

確かに、それも言えている。

「そのことを聞いたんだけど、気のせいだろうっていうばかりなんだ。それにあいつ、なんていったと思う？」

「何？」

「 ” お前も夢魔に殺されるぞ ” だってさ」

まさか！ あいつは未だに夢魔だとか何とかいっつものを気にかけていたのか？

いや、リトルのことで頭が一杯になっていた僕も人のこと言えた立場じゃないけど。

それよりも、気になるのは……

「お前も？」

「そうなんだよ。俺も気になってたんだ。

お前もってことは、他に誰か殺された奴でもいるのかよって話だよな」

僕は黙ってリップの話聞いた。

「ここだけの話だぞ？」

リップは、まゆをひそめて、唇に人差し指を当て、ひそひそ声で喋った。

「うわさによると、ケビンの兄のケレックって奴が、以前死んだらしいんだ」

「え?!」

僕は耳を疑った。

「おい、声がでかいぞ！」

僕はリップの言った言葉が信じられなかった。

じゃあ、ケビンがこの前無断で休んだのは、そのせいだったのか？妙な思い込みが頭の中を駆け巡る。

「いいか、落ち着いて聞けよ？ どうやらそのケレックは、朝起きたときにはもう死んでいたらしいんだ。原因は今のところ良くわからないんだけど、阿多起きたときには、そいつの体がもう真っ青だったみたいだぜ？ まるで血を抜き取られたみたいだよ。本当、吸血鬼にでも襲われたのかよって話だよな。でも、ケビンはこう思っているらしいんだ。いや、ケビンだけじゃないかも」

あのケビンがどう思っているって……？ もう答えは目に見えてい

る。
僕は、ごくりと唾を飲み込んだ。

「夢魔に襲われた」だよ」

リップは片方のまゆを吊り上げて、まるで信じられないだろ？ と、でも言いたそうに、僕の顔を覗きこんだ。

そういえば、ケビンはあの時、”そのうち大量殺人が起こるかもしれない”と言っていた。

嘘だ……。今、まさしくそれが、本当になったとでもいうのか？ たかが、ケビンの予言が？

しかし、僕は体中に悪寒が走るのを感じた。

まさか……。

第三十七話・失踪・

「あいつはどうかしているよ。最近では、俺も理解できなくなってきた」

リップからその話を聞いたとたん、僕は深刻な問題をたたきつけられた気がして、午後は気が気じゃなかった。

放課後にも、気分を落ち着かせるためにチョコレートを買に行きたいところだったが、ジェシーとの約束をすっぽかすワケには行かない。

仕方なく、僕はシルヴァニア公園へ行くことになった。そんな中で、僕は本日二度目のビックリを体験することになる。

帰宅後、僕は学校でジェシーに渡された猫の缶詰めを持って、シルヴァニア公園へ向かった。

シルヴァニア公園というのは、いつでも洞窟の中のような暗い公園だ。遊びにくるような人はまずいない。なんと行ったって、あそこは不気味の一言につきる。

昼間でもほとんど公園に日が射さないからね。うっそうとした木々は、夏の風でさえ、氷の女王が吹いた北風のように変えさせる力を持っている。

今日もシルヴァニア公園は、ひどい湿気で地面はぐっちょぐっちょにぬかるんでいた。

霧も出るようになっていた。

もう秋ということもあるのか、ここのところ、雨続きだ。そのためか、町はすっかり湿って落ち込んでいる。

枯れ葉の匂いが立ち込む、どのどんなに古くさい雑木林よりも

陰気で不気味なシルヴァニア公園を入っていけば、丁度、中央に当たる部分に”ひだまり広場”がある。

ここは、唯一、ルヴァニア公園の中でも、ましな場所だといえよう。

なんといったって、奇跡的にも、ここには日が差し込んでいるのだから！

ほんのわずかだけどね。

でも、今は雨が降りそうなほど空がぐつついているから、ほんのわずかな日の光さえも、届いていなかった。

ひだまり広場には、真中の赤いさびついた時計塔を囲むように、四つのさびついたベンチがそれぞれ向かい合わせで並んでいる。その中でも、特に劣化が激しくて、ほとんど茶色にしか見えないようなベンチの後ろにある、雑草で生い茂った花壇の中に、ケケの入ったケーキ箱がある。

僕は、そのケーキ箱に近寄った。

「さあ、ケケ。ごはんだぞ」

しかし、何の反応も無い。

「あれ？ ケケ？」

僕はケーキ箱の中を覗いたが、ケケはそこにはいなかった。

きつと、どこかに出かけているのだろう。ネコだって、散歩くらいするものだ。

僕は、ケケの隠れそうな草陰や、木陰を探してみた。

ひだまり広場の草木を一通り調べ終わることには、手も足もドロだらけになっていたが、已然としてネコはみつからない。……もしかしたら、もっと遠くのほうへ言っているのかも。

日はもう暮れかかっていた。

雲で白く覆われた空は、相変わらずのままだったが、あたりはうすぐらく、木の陰が黒く濃くなってゆく。

僕は早いところ帰りたい気分だった。あまり遅くなると、また母にしかられる。 外出禁止もいいところだ。

しかし、ここ何日かシルヴァニア公園に通っていたせいもあって、僕は暗闇が嫌じゃなくなった。

これがなれというものなのか。 少しくらいの暗がりなら、良く見えるようになったし。

早く猫を探し出さねば。 完全に暗くなる前にね。

僕は、ひだまり広場から抜け出して、広場に近いところから順に猫を探しまわった。

ぬかるんでいるシルヴァニア公園を移動するときには、足元に気をつけなければならぬ。

だから、僕は何度もぬかるみに引っかけた。

だが、すっこけそうになりながらも、せかせかと小道を進んでいた。

氷の女王が域を吹くたびに、木の葉がざわめき、冷たい雫が雨のまねをして落ちる。

それが、僕の顔や腕のところどころにあたって、気づく頃には、じつとりと濡れた服が体に張り付いていた。

うーっ、寒い！

やっぱり帰ろう。 ケケなら明日でも探せる。

ケケが逃げ出したことについては、ジエシーに謝っておこう。

僕は、あけないままの猫缶をもって、シルヴァニア公園を後にした。

第三十八話・さよなら、ケケ・

僕が家に着く頃には、日がとつくに暮れ、あたりはほとんど夜になっていた。

その晩、僕はジェシーに謝るために、電話をかけることにした。

「仕方が無いわよ。私も、それくらいのことには予想していたわ」

ジェシーが頑張つて、僕を元気付けようとしているのはわかったが、彼女の声はひどく落胆していた。

「明日はきつと、見つかるよね」

「そうね。もう一度探しましょう?」

受話器を置いた後、僕は思わずためいきをついた。

ここ何日かは、嫌なこと続きで気分が最悪だ。

この前、ジェシーと一緒に大道芸を見に行ったときは、大量のカラスに襲われたし、リップはケビンの兄が殺されたと言っていたし、それに今回の猫の件もある。

こんなに、嫌なことが重なるときはどうしようもない。運が良くなるのを待つしかないか。　　運が良く

翌日。運の神様は、いたずらに僕に微笑んでくれた。

今日はいつもどおりの授業だった。放課後になるのが待ち遠しい。早く授業が終わらないかな。

やっこの思いで授業が終わったあと、僕はジェシーと一緒に、急いでシルヴァニア公園へと向かった。早くケケを探し出したいという思いが募る中、シルヴァニア公園はいつもと同じようにじめじめと湿っている。あと、もうすこしでひだまり広場だ。しかし、そんなとき、足元をさっと横切る何かをジェシーが捕えた。

「あら？　今、何かが私のそばを通っていったわ」

そういつて、彼女は後ろを振り向く。どうせ何かの見間違いに決まっている。

僕は、

「何かの間違えじゃない？」

と言つてジェシーをからかったが、ジェシーは「違うわ」といった。

「ケケよ！　ほらみて、あの毛の色！　ケケに違いないわ」

僕はまさかと思って、さっと後ろを振り返った。

するとそこには、尻尾を振つてそそくさと去つて行くケケの姿が…

…！

僕らは、はじかれたようにケケのあとを追いかけた。

しかし、ケケと僕等の感覚はどんどん離れてゆく……僕等が走ればねケケもそれをわかつているかのように走り出すのだ。ったく、賢いやつめ。取り逃すわけには行かない。

僕とジェシーは息を切らして、ケケの後を追った。

やがてシルヴァニア公園の外に出てきた。

シルヴァニア公園のゲートを抜けたとき、すぐさま左右に目を走らせた。

すると、右側にある信号を渡っている人たちにまぎれて、道路を横断しているケケの姿が見えた！

僕は、信号を渡っている人たちを避けながら、必死でケケを捕まえようとした。しかし、ケケのすばしっこい動きにひけを取っ手、結局信号のところでは捕まえられなかった……。

しかも、四人の人にぶつかった。

続いて僕たちは、ケケを追って、徐々に商店街のほうへと向かっていった。

そろそろ息が切れてへなってくる……しかし、せつかく見つけられたケケを逃がすワケにはいかない！

少し休んだ後で、再び僕は猫を追いかけた。ジェシーも劣らずついてくる。

もしかしたらジェシーのほうが体力が上なんじゃないかと思った。だが、それについては、後だ。

自転車やトレコードショップを右肩越しに通り過ぎた。

そして、古本屋と肉屋の隙間にある狭い路地に突き当たったとき、ケケはそこへ逃げ込んだ！

よし、路地を入ったところには、レンガでできた壁がある。

猫はもう逃がさないぞ！……と、思った瞬間。

なんと、ケケは、レンガでできた壁の、やっと腕が入りそうなくらい小さな隙間から、逃げ出そうとしているではないか！これは一大事だ。

僕は、急いでレンガの壁に駆け寄った。レンガのところどころにあ

る、わずかなでこぼこに足を引つ掛けて上れば、向こう側にいける。しかし、この壁というのが、なかなかの厄介者で、思うようには上れなかった。なんと言っただって、つるつる滑る！ でこぼこの加減が充分ではないようだ。やっとの思いで上りきれた頃には、もうそこにケケの姿はなかった。かわりに、銀色の長い髪をした、女の人がいた。

その女は、突然壁の向こうから現れた僕にたいそう驚き、一、二、三歩あとずさる。そして、疑い深い目つきで僕をにらんだ。

僕は、はずむ息を抑えながら

「あの、猫を見かけませんでしたか？」と、問い掛けた。すると、女は、かなりえらそうな口調で

「猫？ そんなもの知らないわよ。 なんかの見間違いなんじやない？」「
といった。

「そうですか……ハアハア。 ありがとうございます」

その後、僕は壁に上らず、遠回りをしてジェシーの元へと帰っていた。

ジェシーは僕の姿を見るなり、飛びついてきた。

「どうだったの？ 猫は見つかった？」

僕は、その期待を裏切るように、うなだれた。

「じゅめん……」

するとジェシーは僕と頃へそつと寄り添うようにして、肩に手を伸ばす。

「もともとあの子は野良猫だったもの。きっと、お母さんの下へ降りたかったんだわ」

僕は、ばつが悪くて口を経の字に曲げた。

「レンディが気にすることじゃないと思う。今回のことは忘れましょう？ 猫がいなくなつて、私は平気なもの」

僕は最後の言葉にはつとした。

しかし、なんと答えたらいいのかわからない。

それからジェシーは僕は、ほとんど何も話さずに各々の家へと帰った。

もう、これで毎日、僕とジェシーが変わりばんこで猫を育てる夢は終わった……。

短い間だったけど、大好きだった。

さよなら、ケケ。

第三十九話 - 予想外のできごと -

あれから僕は、必死でマフラーを編みつづけた。

リトルが以前、「編物は慣れれば速くできるようになる」と言っていたことは本当らしく、ここ何週間かで、僕はおどろくほど上達した。

あと何日かしたら冬休みが始まる。そんなとき、僕が教室の片隅で教科書やノートの整理をしていると、マックがこんなことを言い出した。

「カップル限定のクリスマスパーティーが今年も始まるそうだぜ？」

そういつて、パーティーのチラシをクラスの皆に見せびらかす。

チラシには、「クリスマスパーティー」たる文字列が並んでいた。

「おいおい、それは上級生だけが参加できるパーティーじゃねえのかよ？」

そう言ったのは、かたわらでチラシを見ていた歯ブラシ少年のマーフィだ。

しかし、マックはマーフィの意見には目をくれることも無く、周りの衆に”お前はどうか？”とでも言いたそうな目つきで目配せをする。すると、そこへケビンが、われさきにと周りの衆を押しつけて、マックの掲げていたチラシに飛びついてきた。

クラスメイトたちの中には、邪魔そうな目つきで彼を見るものもいれば、彼を、待ってました！と、はやし立てるものもちらほら。

「何してんだ、お前ら？　楽しそうなことやってるじゃねえか」

すると、マックは、意気込んでケビンの肩をつかんだ。

「ようよう、ケビンちゃん。お前なら、このパーティに出てくれるよな？」

そう言って、パーティのチラシをケビンに見せた。

するとケビンはそれを見て、さも悪巧みをしていそうな笑みを浮かべる。

「へえ、面白そうじゃん。で、女子は？」

「あ……」

マックは重大なことに気づいたようだ。

「おいおい、カップル限定だったのに、女がいなけりゃ、話にならねえだろうが」

そういって、ケビンはマックの腕を振りほどく。

「そつだよな……」

しかしそのとき、ケビンが何かひらめいたらしく、

「お、そつだ。俺にいい考えがあるぞ？」

と、言ってマックに耳打ちをした。

するとマックはケビンの話を聞くなり、にんまりとした表情で互い

に目を合わせると、クスクスと笑い始めた。

どうせまたくだらないことでも考えているんだ。僕は、教科書の整とんをつづけた。

しかし二人の向かった先は……

「やあやあ、レンディ君。冬休みの計画はもう練ってあるかい？」

ああ、やっぱり！

マックが元気そうにいうと、今度はケビンが口を開いた。

「お前とジェシーは仲がいいだろ？」

ケツ。

ふたりとも、神父さんのような優しい微笑みを浮かべているが、腹の中は悪魔そのものに違いない。

「それでパーティに参加しろってのは、お断りだよ」

僕は、勇気を出して、二人に立ち向かった。どうして、ジェシーと一緒にパーティに出なきゃいけないのさ！ だいたい、彼女とは恋人でもなんでもなくて……しかし、帰ってくるのは、一方的なせがみだけだった。

「何だと？ お前、俺の言うことが聞けないってのか」

ケビンが鼻にしわを寄せている。今にも、えりくびをつかまれそうだ……

するとマックは、いきり立つケビンを抑えて、彼の変わりに前に出てきた。

「そんなこというなって、レンディちゃん。俺達はキミに素敵な体験をして欲しくて、パーティに招待してるんじゃないか」

ケ빈はマツクの背後から怖い顔をして脅してくるが、マツクのほうは、まだやさしい笑顔だ。

今なら、言ってもやれる！

「うるさいなア。いかないといったら、行かないのさ。キミがなんと言おうがね」

しかし、僕が言ってやった！と喜んでいたのもつかの間、ケ빈は僕の机に山積みになっている教科書の仲から一冊の本をとりあげた。

そ、それは……！

「この本を返してほしいけりやあ、パーティにでるんだな！」

嫌なら俺から取り返してごらん！とでも、言うように、黒くて少し厚みのある本を高々とあげた。あれは……僕の父さんの日記だ！

僕はすぐさまケ빈から、その日記を取り返そうとした。

「おい、返せよ！」

「やなこと。そう簡単に返すかよ」

僕は、必死になってケ빈から日記を取り返そうとしたが、ケ빈の身長にはとどきそうに届かない。

ジエシーに助けを請おうとしたが、あいにく、ジエシーは席をはずしている。
そしてとうとう、僕がケビンから日記を取り返す前に、巨人のうめき声が鳴ってしまった。

* * *

お昼休み。

「それで……キミにもパーティに来てもらわなくちゃいけなさそうなんだ」

僕が浮かない顔でそうつげると、続いてすつとんきょうな声が廊下に響き渡った。

「嘘でしょ?! どうして、その本を取り返してやらなかったのよ!」

そう言ったのは、ジエシーだった。彼女は、イライラとじだんだを踏みならず。そして、僕がやらかした(主にケビンとマックが原因だが)できごとにあきれ果てた様子で肩を落とした。

「それで、今は誰がその本を持っているの?」

ジエシーは溜息をつき腕を組んで、僕がなんと言い出すのかをまっただ。かなり不機嫌そうだ。

「きつと……ケビンがその本、いや、その日記を隠し持ってるんだよ。僕の大事な父さんの日記なのに……」

「ケビンったら、どこまでも嫌な子！……でも、仕方が無いわ」
彼女は僕のことを言っているのか、それともケビンのことを言っているのか。
どちらにせよ、僕は自分の背の低さをとことん恨みたい気分になった。
今なら、牛乳でもぶら下がり機でも、どーんとこいだ！

しばらくすると、ジェシーが何かひらめいたらしく、両手の握りこぶしで中を叩いた。

「ねえ、レンディ？ あの子なら、机に日記を入れておくんじゃないかしら？」

しかし、僕はむっつりと答える。

「普段からいたずらばっかりしてるような奴が、そんなバカな真似をすると思っつか？」

だが、ジェシーは引き下がることなく

「でも、やってみるしかないわよ！」 と、言って自分の意見を押し出した。

その後、僕が何度か断ったにも関わらず、ジェシーはせがみつづけた。そしてとうとう僕は、根負けしてジェシーの意見を飲み込んだ。納得のいかないことを飲み込むには難があつたが、僕は心変わりした。そこまで言うならやってみようじゃないか。
物はためしだ。あれこれ考えていたら、遅れをとるに決まってい

る。

先手必勝、相手の隙をついて、日記を奪い取ることをジェシーは考えているのだろう……

放課後、僕たちはケビンがいないところを狙って、彼の机をのぞき見た。

「どっ？」

ジェシーが後ろからひそひそと話し掛けてくる。

僕は、次々と教科書の間指を挟んで、何度も往復したが、黒い影すら見つけられなかった。

そしてとうとう頭を上げ、そっけなく返事をした。

「……無いよ」

「本当に？ まって。 私も探すわ」

ジェシーが歩み出てきたので、僕は彼女と交代した。しかし、結局彼女も僕の日記を見つけられなかった。

「ほらね。 きつとあいつのことだから、もっと難しい場所に隠しているんだよ」

「本人の家とか？」

僕はしばらく思考を巡らせた。

あいつならどこに隠す？

ジェシーが言っているとおおり、本人の家に隠しているという場合も

考えつる。

彼は家に日記を隠し持っているのなら、どうしようもない。あいつの家に忍び込むのか？

いや、それはダメだ。

そういえば、今まであいつは僕にいたずらをするとき、必ず僕の性格を利用してきた。(これは僕の分析した彼のデータだ)

だから、きっとあいつは僕がパーティーに出たがらないことを利用して日記を隠しているのでは？

何せ僕は、自分でもチキンだという自覚がある。

だとしたら、あいつが「返してほしけりや、パーティーに出るんだな」といったことに筋合いがつくじゃないか！

僕はパーティーに出ようとおもった。そうさ。相手のすきを狙えないわけじゃない。

まだチャンスがあるんだ。

でも、ジェシーは賛成してくれるかな……。

第四十話・二番目の計画・

「言っておくけど私、パーティーにはでられないから」

「ええっ、そんな……！」

僕はたいそう驚き、そしてパーティーに出られない理由をジェシーに迫ったが、彼女は心ならない態度だった。

「何か用事でもあるの？」

「ええ。確か、十二月二十四日でしょ？ その日は、家族で出かける予定があるの」

まさか。

これで、僕がケビンから日記を取り返すめどは崩れ去った。その前に、僕の思考がジェシーにバレていたことに驚いた。

「どうにか、都合をつけられないかな？」

「無理よ。その日しか、家族で出かけられる日は無いもの」

すると、視線を落とした僕をみて、彼女は溜息をついた。

「ケビンだって、事情を説明すればわかってくれるわよ」

「そうかなア……」

しかし、いつまでもうじうじしている僕に、流石のジェシーもいら

だったらしく、さっきよりもひどいため息をつた。

「レンディ？ 時にはやってみなきゃわからないことだって……」

「わかってる。 わかってるよ……けど……」

僕の中にある素直になれない心がジェシーの気遣いをはねつけようとする。

しかし、その数秒後に僕はあることに気づいた。

いままでは、ケビンにありとあらゆることを、行動で現さなきゃいけないと考えていた。 つまり真正面からぶつかるといふことだ。

さっきの言動が、そのいい例だと思う。

でも、ジェシーは、頭の悪いケンカごっこなんて、よく思わないのだから、

「……」
「だから、」ときには やってみなきゃいけないことだって……」と
いったんだ。

僕はジェシーに向き直った。

「わかった。 それなら、ためしてみるよ。 でも、ダメだったら

……」

そう言いかけたとき、ジェシーが釘をさした。

「だめなんていうのは無し」

そして、僕のことをじっと見据える。

「そ、そうだね。 うん、きっとそうだ」

僕はその無言の圧力に屈して、答えを返さざる得なかった。しかし、まだ心には思いとどまるものがある。ジェシーの意見は一応、理解できたよ？ でも、もしかしたらそんなことしても無駄なんじゃないかって……。何せ、ケビンには口で勝ったためしがない。

やはり結果は、予想通りだった。

幾度となく、僕は ケビンに日記返してくれるようたのみ込んだが、その意見が通ることは一切なかった。そして、とどめの一言にケビンはこう言った。

「お前みたいなやつがただで俺から物を譲り受けようだなんて十年早いんだよ！」

十年どころか、マイナスで引いてやるくらい、お前には早すぎるって話だ。

それは、あの日記はもともと僕のもの！

どうしても返してもらわなくちゃ。

そのためには……やっぱり。

受信メール001

12月22日

宛先：l i t t l e - v e g n e y @ a b c h o t m a i l . c o m
件名：お願い！

ケビンに日記をとられちゃった。

向こうは僕がカップルパーティとかいうものに出ないと、日記を返さないつもりらしい。ジェシーと一緒に行くはずだったんだけど、彼女は都合が悪くていけないみたいなんだ。

どうしよう!!

- e n d -

僕はメールの返事が待ちきれなかった。

二分おきに受信メールを確かめたが、一向にリトルからの返事が来ない。

気分転換に、好きな本を読んでいたら、丁度終盤に差し掛かった頃に、電話が鳴った。

「もしもし、レンディか？」

「うん！ 僕だよ」

「メールはみたぞ。お前の日記というものについて、少し聞かせてくれないか？」

リトルの口調は、若干焦っているようだった。

「わかった。えーっと……、たぶん僕の父さんの日記だと思うんだ。すごく不気味なんだよ。真っ黒い表紙に、白い線で星がかかれていてね。ケビンによると、魔術師が何か日記じゃないかっていうんだ」

「それは本当か？」

リトルが突然、大声で叫びだすので、僕は失笑した。

「ちよつとまってよ。何も僕の父さんが魔術師だったなんていう証拠はない」

そう言いかけたところでリトルにさえぎられた。

「わかった。もう良い。まったく、お前は どうしてそんな大切なものを……！」

リトルはひどく嘆いている。

「学校に持っていったんだ……」

僕が申し訳なさそうな口調で答えると、今度はリトルがため息をついた。

「ああ……なんてことだ。これは大変なことになったぞ」

「大変なことって？」

「フン。お前な、それはお前の父さんなんかの日記じゃない。話を聞く限りは」

え、どういうことだ？

「所詮お前は何も知らないだろうが、簡単に説明させてもらうと、それは魔王、ウィツカーゾルクの研究日記だ」

「魔王、ウツカーゾルク？」

僕は取って付けたように返事した。

「とりあえず、詳しい説明はあとだ。今、いっぺんに話しても理解しきれないだろう。」

ところで、どうしてもそのケビンとかいうやつから日記を取り返せないのか？」

「う、うん……。無理だと思っ」

僕の思いつく答えは一つしかなかった。

しかし、リトルはあきらめず、僕に聞きつづけた。

「他に、付き添ってくれそうな女の子はいないのか？」

そんなものがいたら、今更……。

僕は、皮肉と落胆を交えて、こつこつ言った。

「それがいたら、今更リトルなんかから電話してないよ」

それを聞いて、とうとうリトルも煮詰まってしまったらしく、「ふうむ……。」と言ったあと、何も言葉を返さなくなってしまった。

その後、僕たちはしばらく考え込んでいた。

ジェシー以外に、僕とパーティに出てくれそうな人がいるのか、またケビンから日記を取り返すにはどうしたらよいのか。

二人とも思いつけずすぐに発言していったが、十分経っても、なかなかいい案は見つからなかった。

そして、次第に諦めのムードが漂ってきたとき、リトルが突然、こんなことを言い出した。

「私が、女になったらダメか？」

第四十一話・尾行・

僕は、リトルの発言に度肝を抜かれた。

「え?! リトルが、なるの?! その……女の人に?」

リトルは平然と

「そうだ」

と、答えた。

これまた、リトルが大真面目に言っただけだったので、僕は思わず噴出した。

冗談だろ……?」

「おい、笑いすぎだぞ。こちとら真剣に言っただけなのに」

冗談ではないようだ。

「ごめんごめん、そんなつもり無かったんだ。で……、どうするっていうの?」

「フン、お前なんかには想像できないだろう。今に見てる? 美の絶頂というものを見せてやる」

確かに、彼は未来人だ。と、いう事は、正体をバラさないためなのか?

でも、彼が未来から来たという証拠なんて、どこにもない。確

かに、過去を変えれば未来は変わる……。

普通に考えたら、そんなこと絶対にありえないだろうけど、でも今は信じられないようなことが目の前で起こっている。

こいつをどこまで信用していいのかわからないが、仮にそれが真実だとして、仮定した場合、どこかにリトルの昔の姿の奴がいるのかもしれないということだ。

だとしたら、そいつにバレないようにするために変装しているのか？

一体、だれが昔のリトルビニーなんだろう……。

「日どりはいつだ？」

不意にリトルが尋ねてきた。確か、ジェシーは

「クリスマス・イブの日」

と、言っていたハズだ。

「わかった フフ」

彼はせせら笑うようにそう言った後、

「まずは、あの計画を実行してからだ」

と付け加え、電話を切った。

実は、あの計画というのは、ジェシーの記憶を消すことだ。

僕が、ケビンやジェシーに魔術師であるということバラしてしまったあの日、僕はリトルから信じられないことを聞かされた。

それは、魔術師であることが一般人にバレた場合、そいつを抹消するか、同じ魔術師として受け入れるかしか、ないことだ。

しかし、彼はそのどちらでもない方法を取ることが出来る。

その方法というのは、本人の記憶を消してしまうというものだ。

彼は、相手の脳に特殊な電波を当てること、記憶を消すことができるかと話していた。

電波を調節することで、必要な部分だけの記憶を消すことができ、強ければ強いほど、何日分もの記憶を消すことが出来る。しかし、失敗しやすいのが難点らしい。

結果、ジェシーの記憶を消し、僕が魔術師であったことをなかつたことにするという話になった。

しかし、そんな夢のような話が、本当にあるのかと言いたところだが、彼は未来人。

未来の科学技術がどの程度発達しているか想像できない分、今は彼を信じるしかない。

次の日。

僕は、朝からドキドキとワクワクとソワソワを同時に味わっていた。そんなことをよそに、ケビンはいいい気になって、僕のことをからかう。

「どうしたんだい？ パーティはもうすぐだぞ」ってね。

でも、そんな彼を、明日、僕がぎゃふんと言わせてやれると思うと、ウフフ……楽しみで仕方がない。

それにしても、リトルは明日、どんな格好をしてくるんだろう？

まさか、女の格好をしたまま、仮面をつけてくるのではあるまい。

いや、ちゃんと取ってくるはずだ。

僕はそれゆえ、こつそりと楽しみにしていた。
今度こそ、見てやる。 リトルの仮面の下を……。

「妙に嬉しそうだけど、何かいいことでもあったの」

「ううん、別に」

やはり、ジェシーが一番早く僕の変化に気が着いた。

もしかしたら、僕がわかりやすいだけなのかもしれないが、今回のことも、ジェシーには秘密にしておこう。

リトル・ビニーが関係しているからだ。彼は、自分のことをできるだけ外部に教えないでくれといていた。彼のことが一般人に知れると、大変なことになるらしい。どのように大変になるのかはわからないが、とりあえず彼の言う事に従っておこう。後々になって、ややこしい事にしたくない。

と、いうワケで、ジェシーとはいつのもように、接しておいた。

「そういえば、ジェシー。クリスマス・イブの日はどこに出かける予定なの？」

「ブロードウェイのストリープホテルよ。でも、そのまえにレストランによるけど」

ほうほう、なるほど。

「へえ。旅行、楽しんできてね」

僕が、調子よくそういうと、ジェシーは浮かない顔で

「わかったわ。 レンディのことは心配だけど……」

と、言った。

「大丈夫だよ。 ちゃんと、手は打つてあるから」

そう、手は打つてある。

下校してから、眠りにつくまでは、明日のことだけを考えていた。明日は、夜の10時にセントラスホテルの三界に集合することになっている。

そまでに、どうやっていえからこっそりと抜け出せるか、メールでリトルと話あった結果、あらかじめ彼に家の前で待機してもらうことになった。

そして、僕は、友達の家泊まりに行くということで午後六時に家を出る。

そして外で待機してくれていたリトルの車に乗って、ジェシーのかけ先に行き、チェックインするのだ。 そうすれば、ジェシー達が寝静まったのを合図にリトルがジェシーの記憶を消せる。

しかし、それにいたるの方法については、詳しく説明してくれなかった。

「母さん、友達の家遊びにいつでもいいかな？」

一通りの荷物を抱えて、僕はリビングにいる母にそう告げる。

「何言ってるのよ。もう六時でしょ？」

「泊まる約束をしちゃったんだ……。明日から冬休みじゃないか。向こうの親御さん達は歓迎しているよ。ね、いってもいいでしょっ。」

すると母は、皿をタオルで拭きながら、いぶかしげに振り返る。

「どこのおうちなの？」

「えっと……。そう。ケビンだよ」

嘘じゃなかったら、はくところだ。

「珍しいわね。まあ、いいわ。向こうが歓迎しているのならいいってらっしやい」

天にも上るほどではなかったが、うそが通ったことにちょっとした喜びを感じた。

母に別れを告げた後、僕は急いで家の近くにある駐車場へと向かった。外はもう真っ暗だ。冷たい夜風が身にしみる。

「遅れてごめん」

僕が来たと同時に、濃い銀色の車の前方ドアが開かれた。

「待ちくたびれたぞ」

僕は、リトルのとなりの助手席に座る。

それと同時に、リトルはサイドポケットに挟まっていた地図を取り

出して、中身を吟味し始めた。

「お前の女の子は、どこにいるんだ？」

そう言つて、リトルはオックスフォードシャー州周辺の地図を広げてみせる。

「ジェシーは確か、ブロードウェイのストリープホテルに泊まると言つてた。でも、其の前にレストランで食事をしてから来ると思つ」

「レストランだと?!」

するとリトルはあえいでハンドルを叩いた。

僕は、心配になつたので、「何か不都合なことでもあるの？」と、尋ねてみた。

「本当は、ホテル内で食事をしているときに忍び込みたかつたのだが……ふむ、まあ良い。先を回るに越したことは無い。行くぞ、レンディ」

リトルは少し納得のいかない様子だった。

そして、車にエンジンがかかり、僕等はストリープホテルへと向かつていった。

第四十二話・決行・

その後、僕はリトルがこれからどうするのかについて、ずっと考えていた。

確かに、ジェシーたちが先にレストランで食事をしてきてしまったのなら、ホテルの部屋をあけている確率がぐーん、と減ってしまう。

そうだとしたら、僕たちはどうやってホテルの部屋に忍び込めば良い？

「ねえ、リトル。このプレゼント、渡せるかな？」

「どうした？」

僕は疑問に思ったことをぶつけた。

「ジェシー達が部屋にいる確立は高いよね？ どうやって忍び込むの？」

「ジェシー達の来る前に部屋に忍び込めばよいだろう」

「そっか！」

それなら合点がいく。

「寝ているところをずかずか入り込むのはきが引けるからな。そのためにも、だ」

そして、一息ついた後、彼は僕に念を押した。

「それと一つだけ言っておくが、お前も入るとなると、二倍の苦勞がかかるぞ?」

「別に構わないよ。 ジェシーにプレゼントは渡せるんでしょ?」

すると、彼は僕をおちよくるように

「まあな。 お前が何かしらのへまをやらかさなければな」

と、言った。

ホテルについたあと、僕達はひとまずジェシー達がチェックインしていないかを確認するために、カウンターのそばに置いてあった予約票を盗み見た。

大丈夫、まだチェックインされていない。

他の客達に若干あやしまれつつも（なんといいっても、リトルの格好が異常だ）、僕等はホテルにチェックインした。

「ねえ、これからどうするの? プレゼントはどうすれば……」

僕はあらかじめ、リトルの意向をくみとっておきたかった。 プレゼントのこともあるし。

なので、自分達の部屋に向かうまでの間に、彼からできるだけ話を聞こうとした。

「プレゼントなど後回しだ。 他の日にしろ」

しかし、彼はなかなか手の内を明かしてくれない。どうしても渡したいから、彼が何をしようとしているのか知りたいのに。

「どうしても今日じゃないとダメなんだ！ リトルは一体、何を考えているんだよ？」

しかし、彼はあまり相手にはしてくれなかった。

子供みたいにわざと機嫌を悪くしてみたりもしたが、彼には通らない。

「フン、そんなに渡したいのならことが済んでからだ。相手には気づかれたくないからな」

「……わかってるってば」

僕はむっつりと答えたが、彼には僕の考えていることが図星だったらしく、

「だいたいなあ、お前に何かしらを教えてところで、そのプレゼントやらを渡すための隙を見つけ出そうとしているのだろう？」

と、言った。

そして、今度は打って変わって、ものわがりの悪い子供にやさしく諭すような口調で返してきた。

「あの子を助けてやるためだと思え」

ケツ。何が助けてやるだよ。そんなの子供に自分の言い分を押し通すための口実に過ぎない。

と、僕は思った。 ときには ひねくれた考えも頭をすり抜けるものさ。 子供っぽい態度を取ったからって、僕が本当に子供なワケじゃない。 それくらい、わかってるくせに。 じらすなよ。

だいたい、どうしてこんなことをしてまで、ジェシーの記憶を消さなくちゃいけないのか、僕にはわからない。

世の中の深い道理だなんて、ましてやこの男の考えていることなど、ぼくにはひとつも理解できない。

記憶を消すことに一体、何の意味があるのか。

それはこの男、リトル・ビニーだけが知っている。

「着いたぞ」

目の前の扉には、”701”とかかれたプレートが貼り付けられていた。

ここが、僕達の泊まる部屋だそうだ。

サービスマンの人が部屋のドアを開けてくれた。

「どうぞ、ごゆっくりとしてみてください」

そう言っって部屋の中に僕達を案内すると、彼はリトルに鍵を渡した。

そして、頭を下げて部屋を出ようとしたそのとき、リトルがサービスマンの足を止めた。

「おい、ちょっとまで。 聞きたいことがある」

「はい、何で……」

次の瞬間、リトルはサービスマンのえり首をつかみ、顔面に一発こぶしを入れた後、うなじにチョップを加えて、サービスマンを気絶させた。

僕はその光景を見て、思わず息を飲み、あぜんとした。

「レンディお前も手伝え」

彼はそう言って、ぐったりとしたサービスマンを抱え上げる。

「ど、どうするんだよー！」

僕がとっさにそう答えると、彼は落ち着き払った様子で

「いいから、お前はあのクローゼットのトビラを開ける」

と、クローゼットを指差す。

その指の先を見ると、そこには何の飾り気も無い木製の大きな扉があった。あれがクローゼットだ。

僕は急いで、クローゼットの扉を開けた。

防臭剤の匂いがムンと漂う。まさか、この中に……？

「よし」

やはり、リトルはサービスマンを抱えたまま、その中に入っていた。

そして、リトルはクローゼットを閉める、と僕に命令する。

「ねえ、何をするつもりなの？」

「いいから閉めるといつているだろうが」

しかし、リトルに時間が無いとせかされたので、僕はしぶしぶクローゼットの扉を閉めた。

数分後、僕はとんでもないものを目にする。

「え……もしかして、リトル・ビニー？」

「そうだ」

まさか！ まさか、こんなところでリトルの素顔を見られるなんて、夢にも思っていなかったよ！

クローゼットの扉の中から出てきたのは、中性的な顔立ちのサービスマンだった。さっきのとは中身が違う。もともといたサービスマンは、どちらかといえばヒゲ面のオヤジタイプだ。

まさか、もう、まさか本当にリトルが仮面をはずして、こんな格好になるだなんて……

「やつの服をはいで変装につかうことにした。 奴には、しばらくの間眠っていてもらう」

「あの……さ。 ひとつ聞きたいことがあるんだけど」

「何だ？」

僕は、リトルの顔を指差した。

「それって、リトルの素顔なの？」

「いや、違う」

そんなバカな！

「複願技術を用いて作った、仮の顔だ。　フフ、私が本当に仮面をはずすとも思っただか？」

「そのまえに、あなたの心の仮面をはずしたら？」

僕は、冗談のつもりで言ってやったが、

「うるさい、どうせその言葉の意味もしらないくせに」

リトルはみごとに僕を罵り返した。

ここまで言われると、頭が上がらない。

「お前には、あの男の番を頼むぞ。　私はジェシーのところへ行ってくる」

そう言って、リトルは部屋から消えた。

僕が、あの男の面倒を見るのか。

もし、あの男が起きたらどうするんだ！

その後、リトルが気絶させた男と二人きりになってしまった僕は、もしもあの男が起きてしまった場合のことを考えていた。時計の針が、嫌というほど、耳障りな時間の刻み方をする。　しずまりかえったこの部屋も、あの男が目を覚ませば、静寂が打ち切られる。

あの男が起きたらどうする？

あの男が起きたら……

いや、起こさせないようにすればよいのでは……？

ベットの枕もとに質素な白い電話があった。

僕はそれを使い、まず、サービスカウンターに電話をかけることにした。

「あの、すみません」

「はい、何でしょうか」

澄んだ声の女性スタッフが受け答える。

「睡眠薬はどこにありますか？ あの、寝つきが悪くて」

「睡眠薬でしたら、歩いて3分のところに薬局が有りますが」

「わかりました、ありがとうございます」

僕は電話を切った後、すぐさまバックの中をあさった。

よし、財布はある。中には、八ポンドと七十二ペンス。少し頼りないが、これなら睡眠薬が買えるハズだ！睡眠薬を飲ませておけば、二、三時間はもつだろう。

僕は男に気づかれないうつ、そっと部屋を出、速やかに薬局へと向かっていった。

第四十三話 - 決行 2 -

ホテルの中は家族連ればかりだ。
もし、ジェシーたちとばったりでくわしちゃたらどうしよう……。
そんなことをもんもんと考えていたとき

「あら？ レンディじゃない？」

と、いう不意に背後から女の子の声が聞こえてきた。 やばい、やばい、やばいよ！ どうしよう！

声の主はジェシーなのか？！

心臓の音が耳に聞こえそうなほど高鳴っている。

見てみぬ振りをするか、それとも、潔くここに来た理由を話すべきか？

選ぶべき道は二つしかない。

僕は、そつと後ろを振り返った。

……最初に目に入ってきたのは、茶色い髪をした女の子。

そして、その家族と思われる女性と赤ん坊だ。

大丈夫、違うレンディのことを言っている。それに彼等は、ジェシーとは関係のなさそうな人たちだ。

僕は、ほつと胸をなでおろし、急いでホテルの玄関へと向かった。

ホテルの玄関からは歩いて三分のところ薬局がある。

急いで買い物を済ませると、僕はジェシー達に見つからないよう、泥棒かスパイになった気分ホテルの部屋にまで帰った。

そして男に気づかれないうつ、そいつのそばにしのびよった。ホテ

ルスタッフだった男は、まだ眠っている。

僕はコップに一杯水を汲み、砕いた睡眠薬をそつと男に飲ませた。吐き出されたらどうしようかと思っただが、神様は僕のことを思ってくれたらしく、上手くいった。神様、ありがとう！

あとはリトルが帰ってくるのを待つのみ……いや？

まだやることがある。ジェシーへのプレゼントだ！
どうやって渡そう？

リトルは事が済んでからにしろといていた。

事が済むことにタイミングを見計らって、ジェシーの部屋に忍び込めるだろうか？

そもそもリトルとは連絡が取れない。

さつき、リトルの携帯電話にメールをしようと試みたが、圏外だった。

それなら、まずホテルカウンターに電話をして、ジェシー達の泊まっている部屋を確認しなくては。

カウンターのところの予約リストは、薬局から戻ってくるときに確認したが、既に片付けられていた。

「もしもし？ あの、クローズですけれども、ぶれいむさんはチェックインされていますか？」

「それをお教えすることは出来ませんが」

やはり、個人情報だからだ。

「どうしても知りたいんです！」

「身内の方でしたら、証明証などを提示していただけないでしょうか？」

「あの、そうじゃなくて、どうしても……」

「そういわれましても、私の一存でお教えできることでは、ありませんので……」

受付の人の声が、イラだっている。これ以上質問しても、良い答えは返ってこないだろう。

仕方ない。何か別の方法を探さなくては。

「わかりました」

ガチャ　。

さて、これからどうしよう……。

しらみぶしに、ホテルの部屋を確認していくのか？

いや、それでは危険すぎる。ばったり出くわしてしまったら、それでお終いだ。

もっと他に方法はないのだろうか？

……そうだ。リトルを探そう！ そうすれば、必然的に彼女の居所がつかめる。彼は、そのために変装したも同然だ。

しかし、彼を探すためには、やはり人目のつかないところを通っていかなければ……。

僕は、一旦外へ出て、裏口から入り込むことにした。

今は、丁度夕食時だ。スタッフたちは、皆、忙しくしている。

おそらく、スタッフルームくらいは、空いている頃だろう。
そこから忍び込めば、人目を避けていけるはずだ。

僕は、かじかむ外の寒さをしのびながら、ホテルの裏口を探した。
そして、入り口の丁度反対側に来た頃、僕はある声を聞いた。
最初はただの会話かと思ったが、どこか聞き覚えるある声だ。良
く聞いてみると、それはベランダの方から聞こえてくる。

僕は、上を見上げた。

満天の星空だ。そして、規則的に並ぶ窓からは温かい光が漏れて
いる。そして、それを背に受けて黒く浮かび上がるベランダ格子
の影。

よく目を凝らすと、四階辺りのベランダで、人が会話している様子
がうかがえた。

彼等は……いや、彼女等は、ジェシー達である！

第四十四話 - 決行3 -

僕は、ジエシー達に気づかれないうつ、すぐ傍の壁に張り付いた。しばらくする……彼女達の会話は、もう聞こえない。

僕は、そつと、彼女等のいたベランダを覗き見た。よし、誰もいなくなっている。

一件落着だ。

このあと僕は、どうやったら、あの部屋に忍び込めるのかを必死に考えた。

彼女等がもうすでに部屋にいることは確認済みだ。と、いうことは、既に、リトルもあの部屋の中に入っているということになる。

どうしよう……。どうすれば、彼女のいる部屋に入り込めるのだろうか。

滞る思考を追い立てながら、もんもんと思索していたとき、僕は突拍子も無ことを思いついた。

……窓から入れればよいのでは？

いや、そんなことが僕にできるといふのか？ きつと無理だ。そうに決まっている。

だが、他に良い方法は思いつかない。

しばらく迷った結果、やっぱり僕は窓から部屋に忍び込むことにした。

ベランダに行くための道を探すと、まず最初に目に付いたのは、何本かの排水用パイプ。

これを上っていけば、四階までたどりつくことができるかもしれない。

い。
丁度、数メートル離れた調理室らしき扉の脇に、太くて上りやすそうなパイプがある。
五十センチおきくらいに、金具で固定されているから、それに足を引っ掛けていけば、上れるはずだ。

ジェシー達の部屋は、確か四階である。

ベランダの柵をつたって、横に移動していけば、なんとかたどり着くことが出来るだろう。

あとは、僕の体力が持つかどうかだ。

僕は、ジェシー達が寝静まる頃の時間を予想しながら、デジタル式の腕時計で、時間を確認した。

夕飯時である今は、午後八時。ジェシー達が寝静まるのは、およそ十時ごろだとすると、約二時間の余裕がある。

その間に、スタッフや他の客（ましてや、ジェシーに？）見つからず、たどり着くことができるだろうか。

いや、時間はたくさんあるから、ゆっくりと上っていても、大丈夫だろう。

僕は足音を消して、そっとパイプを止めている金具によじ登った。

もうどれくらい経っただろうか？ ちょうど、二階のベランダと同じ高さまであがってきた。

手は豆だらけ、足は筋肉痛。

おかげに寒さで指がちぎれそうなくらいに痛い。

あやまって手を滑らせたりでもしたら、一卷の終わりだ。

だから、下は見ないようにしている。余計に怖くなるからだ。

それに、怖気づいてしまったせいで、一旦決めたことを、取り消す

のはなんだか格好悪いからね。

僕は、手のひらにはあと息を吹きかけて、なんとか寒さをしのぎうとした。

しかし、氷のように詰めた鉄筋が、僕の手から温度を容赦なく襲う。人情のかけらもありやしない！

今は丁度真冬時。これで、雪でも降ってきたら最悪だ。

いや、最悪な事態など、考えている場合ではない。

人目につかずに、ジェシー達のいる部屋にたどり着くことを考えなくては。

そのためには、僕が少々きつい体勢でも、がんばって、上っていかなければならない。

僕は、一休みした後、今度は横に移動するために、一番近くにあったベランダに乗り移った。

僕はパイプから二階のベランダの柵につかまった。そして、ジェシーの居る部屋の真下にくるまで移動した。ここからは、上にあげればよいだろう。

このベランダをあがって、三階のベランダまでこれたら、ジェシー達のいる部屋のベランダのすぐ真下にくることになる。

もう指の感覚が無い。しかし、手を滑らせたら、一卷の終わり。動かなくなりそうな体に鞭を打つようにして、ベランダの柵を登った。

気力だけが、今の僕を突き動かしている気がする。

息を荒げて、朦朧とする意識の中、僕はやっとベランダの真下までこれた！

僕は、ここから部屋の様子を伺うことにした。

そろそろ部屋の明かりが消えても良い頃だ。
しかし、ジェシー達のいる部屋の明かりは、なかなか消えてくれな
い。

こういう時に限って、本当に一秒一秒が長く感じられる。

僕は、手のひらをこすり合わせながら、明かりが消えるのをじっと
待った。

鼻の奥が痛くて、鼻水が垂れてくる。そして、それをすすり上げ
た時、変化が起こった。

僕は、ジェシーの部屋に目を凝らす。かすかにだが、明かりが消
えた後、ジェシーの母さんらしき人物がベランダ側のカーテンを閉
めている様子がうかがえた。

僕は、落ち着くのを待った。
よし、もう入っても良い頃だろう。

僕は、ジェシーの部屋のベランダにつかまり、柵を越えて戸のすみ
の方へとかくまった。

わずかにあいているーテンの隙間から部屋の様子を覗く……見えて
きたのは、ソファとテーブル。そして、ヒーター。どうやら、
ベランダから入ると、すぐリビングになっているようだ。

右側には、ドーム型に切り抜かれた白い壁があり、そこから紺色の
ベットのシートが見える。

おそらく、あの部屋で、ジェシー達は寝ているのだろう。

僕は、いつリトルが出て来るのかを辛抱強く待った。

……それにしても、寒い。さつきから、ふるえが止まらなくなっ
ている。

もっと、たくさんの服を着込んでくれれば良かったんだ。

僕ということが、何たる失敗をしてしまったことか。

僕は、身震いしながら、カーテンの置くを覗いた。
すると、一瞬だけ僕の目が黒い影をとらえた。よく凝らすと、そこらを行ったり来たりしてうろついている。あれは何だ……？

それよりもリトルを探さなくては。

僕は鬼のように目を光らせて、部屋の中を探った。
だが、さっき目撃した黒い影がそこらを往来してる様子ばかりが目
に付く。

かなり背が高かったのも有るだろう。ふと、見上げるとどうやら
人間が行ったり来たりしているようだった。

そして、その人間は僕をよく知っている人物だった。

そう、リトル・ビーニーだ！

彼は、ホテルサービスマンの格好をしていた。しかし、背格好や髪
型で彼だと判断がついた。

僕はなんとかして、部屋の中で動き回る彼に合図を送ろうとし、手
を振った。

しかし、彼はなかなか気づいてくれない。
流石に、手を振るだけでは伝わらないか。

だが、ここで下手に手を出したりでもしたら、ジェシー達に気づか
れてしまう！ そんなワケにはいかない。

第一、このことは彼女には秘密にしておきたかった。
きつと驚くだろうし……それに、なんて理由をつけたらよいか、言
い訳が思いつかなかったからだ。

さて、何か良い手はないものだろうか？

……そうだ！ 光があるじゃないか！ 寝ている人には気づかれな
いが、起きている人にはわかる方法だ。

僕は腕時計に目をやった。確か、ライト機能がついていたハズ……
適当にボタンを弄くっていると、電子音とともに、数字の背景が照
らし出された。

僕は、それを見せつけるようにして、腕を大きく振った。 たのむ、
リトル、気づいてくれ……！

すると、僕の願いが天に届いたのか、リトルがふと、こちら側に注
意を向けた。

僕は早速、リトルに「中に入れて！」と合図するように、カギの部
分を指差したが、彼はそれを無視して再び部屋の奥へと戻ってしま
った。 どうして……？

僕は、あきらめずにリトルの方を見つづけた。

ダメだ。 気付いてくれそうに無い。

こうなったら、いちかばちか……窓を叩いてみよう。 そうすれば、
彼だって、仕方無くも僕を受け入れてくれるハズだ。
僕は窓を叩いてみることにした。

”ドンドン”

そっと叩いたつもりだったが、寒さのせいで手がかじかんでしまい、
力の加減が上手く出来ない。

しかも、思ったより大きな音が出てしまった！

するとリトルは無言で僕のところまで来て、窓のカギを開けた。
その瞬間、僕は「ああ、なんてことをしてしまったんだろう」とい
う後悔の念にかられた。

きっと怒られるんだ。 それ以前に、ジェシー達が起きてしまうか
もしれないじゃないか……！

「バカめ！ 音を立ててどうする」

リトルは窓の戸を少しだけ開けて、顔を出した。そして、ささやくように怒鳴りつける。感情のこもっていない声が余計に怖い。

僕は、肩をすくめて、上目遣いに彼を見た。

「ごめん、そ、そんなつもり無かったんだ」

しかし、リトルは次の瞬間、意味深な一言を言った。

「……お前、確かマフラーを持っていたな」

「へ……？ う、うん。 そうだけど」

「貸せ」

一瞬、僕は彼が何を言っているのか、理解ができなかった。マフラーを貸せたと?! あ、もしかしたら……

「渡してくるつもりなの？」

「いや、そうではない」

「じゃあ、どうして?!」

一体、彼は何をするつもりだ……？ 次の瞬間、彼はとんでもないことを言った。

「部屋の中はかなり強力な夢魔がいる。それに対抗できるのは、レンディ、お前の持っているマフラーだけだ。今のところはな」

「ちよつと待つて！ これは僕がジェシーのために作ったマフラーだよ？」

「だから、なおさらだ。お前はまだ信じられないだろうが……いや、理由は後で話す。できれば私もこんなことはしたくない。だが、お願いだ！」

もしもリトルの言うことじゃなければ、僕は絶対に渡さなかっただろう。しかし、リトルは切実な面持ちで訴えている。

本当に、この男を信用しても良いのだろうか？ 部屋の中にはかなり強力な夢魔がいると聞いていた。

夢魔……以前ケビンから聞いた話によれば、人を殺す魔物だ。

と、いうことは、ジェシーは今、命の危険にさらされているのか……?!

「……わかったよ」

僕は、パーカーのポケットに突っ込んでいたマフラーを差し出した。青とオレンジで編み上げたしまのマフラーが月明かりに照らされ、毛羽立った表面が青白く光っている。

「これをどうするつもりなの？」

「……お前は外に居たほうが良いかもしれないぞ。私を嫌いたくないならな」

第四十五話 - 戦い -

彼はそういうと、即座に部屋の中へと戻っていった。

しかし、気がかりな発言に、僕は彼の姿を見ずにはいられない。

私を嫌いたくないのなら、と彼は言っていたが、そんなことを言われれば、人間誰しもが気にかけて、その真意を突き止めようとする。僕も、例外ではない。彼の起こそうとしている行動が気になって仕方が無かった。

僕は、彼の行動を観察すべく、少しだけ開いている窓の隙間から、部屋の中を覗くことにした。

リトルはこれから、何をするつもり何だろう……？

僕のマフラーを手で広げている。マフラーがだらんと垂れた。

そして、リトルはマフラーの端をつかむと、それを鞭のようにして宙にはたきかかった。

え……？！

僕は、だんだんと彼のことか心配になってきた。

しかし、そんなことよりも、マフラーの安否のほうが心配だ！

止めにいったほうが良い。絶対に。

あのままでは、間違いなくジェシー達に気付かれるし、僕がせつかく編んだマフラーがどうなってしまうのか、知れないじゃないか！

窓のカギは、さっきリトルが開けて、そのままになっている。

僕は、勇気を振り絞って、部屋の中へ入ることを決意した。

部屋の中は、外とは違ってかわった温かさだった。ヒーターは消されているようだったが、部屋の空気にまだその余熱が残っている。

壁にあいたドーム型の穴を潜り抜けると、マフラーをふりまわしていたリトルがさっと振り向いた。

「来るなどいったらどうが！」

「僕、どうしても納得がいかないよ。リトルが戦っているのは、誰？」

するとリトルは、”言うまでも無い”といつ多様に鼻を鳴らし、ふたたび戦いに取り掛かった。

”お前には奴か、見えないだろう。しかし、寝てみればわかるだろうな。死をもって”

そう言った瞬間、マフラーがこなこなに砕け散った。まるで見えない爆発が起こったかのように、マフラーの毛くずが飛んでくる。

一瞬にして、姿を消した僕のマフラーを目前に、心の底からわきあがる疑問と悲しみに、僕の頭は占領された。

「……………どうやら姿を消したようだな」

リトルは、僕のことなど気に止めず、こなこなに砕け散ったマフラーのくずを拾い始めた。

僕もすかさず、マフラーの残骸に飛びつく。

ああ、僕のマフラーが……

「よかったぞ。 レンディ。 これで一件落着だ」

「何が良かっただよ！ せっかく編み上げたマフラーが台無しじゃないか！」

本当なら大声を出して叫んでやりたい。

しかし、僕等のすぐ傍らではジェシー達が、しずかな寝息をかいて眠っているのだ。

僕は、やりきれない思いで、唇を噛み締めた。

すると、リトルはやっと僕の様子に気がついたらしく、何かを少し考えた後、口を重々しく開いた。

「お前のマフラーがなければ、彼女の……いや、彼等の命も助からなかっただろう。 レンディ？ お前が彼女にあげた最高のプレゼントにまだ気付いていないのか？」

僕が、懇親の思いで作った、手づくりのマフラーをなくしてしまった今、手元にプレゼントと呼べそうな物は、一つも無い。

「何だよ。 最高のプレゼントって？」

すると、リトルはゆっくりと微笑んでこう言った。

「変わらない日常という、最高のプレゼントさ」

きつと、僕には、リトルや本当の魔術師についての理解なんて、これっぽっちも無かったんだろう。

正直なところ、喜んだらいいのかすらも、判断できない。

ただひとつ。今の僕にわかることがあれば、変わらない日常が幸せだということに対する疑問だ。
だって、

「ジェシーにとってはね」

そう。僕はもう、変わってしまった日常の中にいるから。毛くずを一通り集め終わると、リトルは僕に質問をした。

「他に、記憶を消さなければならぬ人はいるのか？」

「そうだな……」

しまった。今までジェシーのことばかりに木をとられていたせいで、あの時のメンバーを思い出せない。

僕は、今にもほつれそうな糸を辿る思いで、記憶をさかのぼっていた。

確か、あの時……そう、ケビンに僕とジェシーが神殿に行くところを目撃されたときに、居合わせていたメンバーだ。
僕と、ジェシーと、ケビンと……

「リップだ！」

そう、次はリップのところへいかなければ、ならなかった。

第四十六話・リップの家でひと騒ぎ・

何食わぬ顔でジェシー達の部屋を抜け出した後、僕はリトルをリップの家まで案内した。最初、何故リップのところへ行くのか、とリトルに訊ねられたが、僕は「あの時、僕が魔術師だつてことを知った人間だから」と説明をし、彼を納得させた。

しかし、彼の記憶を消す方法は、なかなか難しいものである。

第一、彼は、親家族と一緒に家にいる。

どうやって、家に忍び込めば良い……？

ジェシー達の時と、同じようにはいかない。あらかじめ忍び込んでおくことが出来ないぶん、やはり問題は難しい。僕たちは、そのことについてしばらく考えをめぐらせた。そして、リトルと一緒にあれこれ相談してみたところ、結果的にリトルが家庭教師のふりをして、リップの部屋に入るといふ作戦になった。

残念なことに、僕は車の中で待機することになった。

どうしてか、と聞いたところ、リトルは「よく考えてみる。お前とリップは知り合いだろ？ 学校のことだから、親も知っているはずだ。リップの記憶はいずれ消されるのだから構わんが、万が一のことがあってみろ？ 親は黙っちゃいない」と、言った。それもそうだ。

しかし、家庭教師がこんな時間にくるのは、おかしい。そこで彼は、リップの部屋に忘れ物をしたから、家庭教師の代理人が彼の部屋に忘れ物を取りにきた、ということにすれば良かろう、と主張した。

上手く行くかどうかはわからない。（そもそもリップに家庭教師

がついていることは、この前のテストで良い点を取れた理由を自慢されたときに、記憶しておいただけである。だから、今も続いているのかどうかはわからない……！)

ただ、彼の部屋に入ることさえ出来れば、かなりの確率でリップに出会うことが出来る。

そのときに彼の記憶を消せば、無事成功ということになるのだ。

リトルは、トランクの中から適当な服を探し出し、それを着て変装した。顔は、ホテルマンのままである。僕は、堂々とリップの家へ向かって行く彼を見送った。

時計を見ると、既に十時を回っている。

もう眠気が差してくる頃であったが、僕は、時計を見てピリピリとした不安に襲われた。

それにしても今ごろ、ケビン達のいるアパートでは、一体何が起きているのだろうか？

十時に彼のアパートにいくと約束したが、これでは時間を大きく上回ってしまう。

彼は、待っているだろう。きっと、僕の登場を不機嫌そうに待っているんだ。

けど、これを終わらせなければ、リトルに言われた忠告を無視することになる。そう、僕が魔術師であるという正体を、他の人に知られては厄介なことになるから、早めに処理しておけという、忠告だ。

得体の知れないものを相手にするだけに、僕は慎重になっていた。何か厄介なことでも起これば、面倒だ！

いや、既にその厄介な出来事の最中にある。

だが、これ以上……僕の日常を奪われるのは、耐えがたい。

しばらくすると、リップの家から悲鳴が聞こえてきた。

そして、リトルが、リップの父親と思わしき人物にたたき出されて、家の外へ飛び出してくるのが見える。二人は、玄関先で二言三言、口論すると、リトルはとぼとぼと車のほうへ向かっていった。僕は、小さくうずくまった。顔を見られちゃ困る。

第一、リトルの起こした行動に僕が関わっているということ、リップの父親に知られたくない。

父親は、「二度と来るな！」と叫んだ後、ドアを叩き割る程の勢いで、部屋の中へ入った。

僕は、窓の下の方から少しだけ顔を出す……リップの家の玄関からこぼれる光、そしてリトル。よし、誰も見ていないな？

僕は、そつと、もとの位置に座り直した。

「おかえり」

イライラとした面持ちで車に乗り込んでくるリトルに、僕はそうささやいた。

すると、彼は、弾かれたようにわめき散らした。

「この時代の親は、馬鹿げている。リップの記憶を消そうとしたところで、彼は悲鳴をあげて倒れた。それを聞きつけた父親は、飛んでリップの部屋に入ってきやがる。私は急いでリップの記憶を消したんだが……」

そこまで言うと、リトルはさも「馬鹿げている」といったように、肩をすくめた。

「私のことを、強盗か殺人鬼だと思ったらしい」

「まあ……今は物騒だし。　神経を尖らせているのも、無理は無いと思うけど……」

「だが、礼儀がなっておらん」

本当の意味で、礼儀がなっていないのは、どつちだ。

「とりあえず一件落着いたんだし。　次は、ケビンのところへ行かなくちゃ！」

僕たちは、性急にケビン達のいるアパートへと向かった。

彼のいるアパートについてはこの前、ケビンから着たメールで、伝えられている。

僕は、ケビンたちのいるアパートの場所を、リトルに教えた。

「それにしても、どうして僕のマフラーを、夢魔を倒すために使ったの？」

僕はどうしても疑問に思っていたことがあった。　それは、先ほど行って来た、ジェシー達のいるホテルでの出来事である。

リトルは、それについて説明した。

「お前は、どんな気持ちをもって、あのマフラーを作ったんだ？」

今更になって、そういうことを言われると、どうしても皮肉に聞こえてしまう。

だが、僕は、もうすぎたことは仕方がないと妥協して、素直に答えた。

「もちろん、頑張ったよ。　本当に、苦労したんだから」

「そうだろう。認めてやる。だから、夢魔を退治するのに、役だったのだ」

僕は、未だ彼の言っていることを理解しきれていなかった。

「夢魔とは、つまり悪魔の一種だ。それはわかるな？」

「うん……本で読んだことがある。でも、インキュバスやサキユバスのことでしょ？」

「そうだな。ほぼあっている。しかし、インキュバスやサキユバスは夢魔の種類だ。悪魔には何が聞く？」

リトルは僕の目を見つめた。

「十字架？」

「いや、悪魔に効くのは、プラスのエネルギーだ」

まさか！

本に書いてあったことなのに、違っている。

どっちが正しいのかはさておき、僕は夢魔に関することに釘付けになった。

「お前は、途中であきらめたりせずに、努力してあのマフラーを作った。それがプラスのエネルギーとなり、その力で夢魔は倒せた。あくまで、あの場合は、だがな」

「でも、もうマフラーはなくなっちゃったよ。これから、どうす

ればいいの?」

すると、リトルは胸を張って、こう答えた。

「普段は、もっと違う方法を使う。それがまさに、私たち魔術師の使う”魔術”というものだ」

第四十七話・ケビンたちのアパートへ・

ケビンのいるセントラルアパートには、リップの家から三十分ほどでたどり着いた。

しかし、時計の針は、既に十一時を回っている。

僕は、足早に車から出て、ケビンのいる部屋に向かおうとしたが、リトルは「ちょっと待て」と言って、僕を呼び止めた。開け放したドアに手をかけながらリトルの方を見ると、彼はどうやらトランクをとりだして、着替えようとしている様子であった。

「外に出るなら、さっさと出る。私は着替えてから行く」

彼がそう言ったので、僕は外に行かないままドアを閉めることにした。

外で待っているのは、寒い。

助手席でリトルの様子を見てみると、彼はトランクの中から女の衣装を取り出して着替え始めた。

目にもとまらない！ 車の中だというのに、窮屈さを感じさせないほど、身振りが軽やかだ。

「ほら、さっさと降りる。ケビン達を待たせているんじゃないのか？」

リトルは何事も無かったかのような顔をして、僕を促した。

ケビンの待っている部屋からは、にぎやかな声が聞こえてくる。

恐る恐るインターホンを押すと、表情をにこらせたケビンが出てきた。

「遅いじゃねえか。待ちくたびれたぞ」

ケビンは僕の全身をくまなく見渡すと、次に女の方へ視線リトルを移した。すると、ケビンは口のへりをゆがめ、

「まあ、あげれよ」

と言って、僕達を部屋に通した。

部屋はざっと見渡した限り、十二畳くらいの広さだ。

男女のペアが三つ。食べ物や飲み物が所狭しとテーブルの上を埋め尽くしている。

僕は椅子に座る前にケビンのところへ寄り、早速日記のことを訊いた。

「僕の日記は？」

「待てよ。そう急ぐなって。それよりも、そこにいる女は一体何者だ？」

やはり勘付かれたのか？ リトルの変装はすばらしい。だが、声だけは変えられないようである。そのためか、僕に説明しろ、と彼の目訴えかけていた。

僕はキョロキョロと辺りを見回して、もっともらしい紹介を考えた。

「えっと……そうだな。うん。僕の彼女」

そう言って、僕はさも慣れ親しんでいそうに、リトルの背中に腕を

回した。本当は肩を掴みたかったのだが、あいにく、僕の身長では彼の肩にまで、腕が回らない。ケ빈は、顔をにこらせた。

「で……そう。他の学校に通っているんだ。ロンドンのパブリックスクールだよ」

自分で居ったあとに、まさかこんなにデカイ女の子がパブリックスクールに通っているのか？ という疑問が湧いてきた。すると、ケ빈はうなずいて

「なるほど。じゃあ、お前等が本当に恋人どうしであることを証明してもらおうか。そうしたら、日記を返してやるよ」

と、ニタニタしながら答えた。

ケ빈の奴は一体、何を考えているんだ？！

何処までいっても、ずるがしこいやつだ！

彼に、リトルの正体を知られていたら、なおさら……。

いつバレるのかわからなくて、僕はハラハラした。

「本当の恋人同士かどうかなんて、本人達にしかわからないじゃないか！」

僕はヒステリックに言い返したが、ケ빈はきっぱりと

「恋人同士なら、キスのひとつくらいできるだろ？ それで認めてやる」

といった。

時間が止まる。

僕達はしばらく凍りついた後で、目を合わせた。周りの男女達が、僕等に注目している。

ちよつと待てよ。確かに、彼は女の人の格好をしている。

変装が完璧なのだから、ケビンや他の人たちに気付かれていないのだろう。

だが、あんまりだ！ 中身は、自分の親ほど年の離れた男である。

しかも、リトル……。

僕はもう一度、ケビンの顔を見つめ直した。

「どうしても……か？」

ケビンはのどの奥で笑うばかりだ。

ケビンが笑い始めると、周りの男女達も釣られて笑い始めた。

「どうした？ 人前じゃできないってか！」

彼は、きつと僕が適当に間に合わせた女の子を連れてきたものだと思っているのか。

それとも、まさか彼の正体に気付いていたのか……？

「……わかったよ！ キスすればいいんだろ？ キスくらいできるよー！」

僕は躍起になってリトルに向き直り、覚悟を決めた。

第四十八話・告白

僕は今、彼とキスをしようとしている。

これは、ケビンが命令したからだ。自分の好きでやっているわけじゃない。

だが、あまりにもひどすぎる！

リトルだって、流石に引いたらしい。困惑した表情を見せている。

「おい！　こんなことは、話に聞いていないぞ！」

彼が僕に向かって耳打ちすると、僕は邪険になって答えた。

「仕方が無いだろ？　彼はいつでもそういう奴なんだ。自分の都合のいいように、事を持っていかうとしているんだよ」

「お前とキスすれば返してくれるつもりなのか？」

「どうだか……」

時間が流れる。刻一刻と、時計は分を刻み、それにつられるようにして周りの衆は動揺する。

いつまでもこうしているのか？　選ぶべき道は、今のところ二つだ。一つは、彼の言ったとおり、キスをして、認めてもらい、合理的に日記を返してもらうこと。

そして、もう一つは、非合理的に、無理矢理日記を奪うか、それとも……？

「早くしろよ。ただでさえこんな時間になるまで待ってやってる

んだからよ」

そう言つて、ケビンは腕時計を指差した。
イライラしている彼に対して、無理矢理な方法で日記を奪い返すことは、したくない。

相手が怒っていると分かつていて、武器もなしに立ち望むライオン狩りでもしているみたいだ。

でも、そんなの僕には無理。死んだつて、やりたくない。

それなら、一層の事、彼の（リトルの）正体をばらして、ここは和解したほうが良いに決まつている。僕は、きつぱりところ告げた。

「ケビン？ 落ち着いてよく聞いてくれ。この人は、男の人なんだ！」

すると、彼はあごを落として、僕とリトルを順に見渡した。
しばらくすると、彼は正気を取り戻したらしく、いつもの調子で

「おい！ どういうことだ」

と、わめく。

「でもそんなの、どうだつていいんだ。日記を返せよ！」

僕は彼に立ち向かった。 和解するためである。

だがやはり、ケビンは言う事を聞かないライオンであった。

「嫌だね！ 返すものか」

ケビンはテーブルに積み上げられたお菓子の残骸の中から、箱を取り出すと、その中にしまつてあつたらしい、黒い塊を取り出した。

あれは、僕の日記だ！

それを、あたかも大切な宝物のようにして、抱きか抱えている。ケビンのエキスがくっついてるみたいで嫌だ。

「お前の日記とは、あのことか？」

すかさずリトルが僕に訊いた。

「そうだよ！ 返して」

だが、ケビンは一向に返す気配など見せなかった。それを察したのか、リトルは彼に迫った。

「貴様、それはレンディの所有物だぞ」

「な、なんだよ。脅そうっていうの？ ハハハ、お前なんか警察に突き出して、訴えてやる！」

「煩い、返せと言つのがわからんのか、小僧」

今で、ケビンは一歩ひいた。愉快だ！

僕は見ているだけである。きつと、彼なら返してくれるはずだ。少し、ケビンが可哀相だけど。

「ケツ。そんなに欲しいのかよ……。それなら、こんなもの、くれてやる！」

ケビンは、日記を窓に向かって、放りなげた。まさか！ ページがめくれる。そして、窓を突き破った！

無数にはじけた窓の破片とともに、僕の日記が落下する。

「カギを閉める！」

次の一瞬で、ケビンはとっさの判断を下した。

男女達は、一目散にカギを閉め始める。僕はどうということなのか、よくわからなかった。

ケビンは、僕等の方を振り返って、不気味に笑みをこぼした。

「どういうことが、わかるか？」

わからない。

しばらくして、カギを閉め終えた男女達が元の位置に戻ってくると、僕等に迫り込んだ。

「少しの間、おねんねさ！」

ケビンはそういって、どこからか持ち込んだビニールの袋を自慢気にゆすった。

ビニール袋の紐は結わいてある。

中に、ふわふわとした何かが詰め込まれているようだ。あれはなんだ……？

ケビンは調子に乗って、えらそうに僕を見下した。

「さあ、理科の問題だ。少し吸うだけで、眠ってしまっもの。なーんだ！」

「クロロホルムか？」

リトルはすかさず、彼に噛み付いた。

クロロホルムって……？

「ケツ。 レンディに答えてもらおうと思ったのによ。

まあ、正解したことだけは認めてやる。 そうだ。 この中には、クロロホルムを含ませたハンカチが入っている。 それで一発。

お前等はグースカピーなのさ！」

そう言つて、ケビンは爆笑した。

さつきとは、立場が真逆だ！ 今度は、彼が愉快的気分についているらしい。

「僕達をだましたんだね？ 日記を返して欲しいなら、とって、いずれの方法を選んでも返してもらえない罠に貶めた」

「そうだ。 日記を奪うことは本当だ。 だが、そのためには、どうしても仲間が必要になったのさ」

「仲間？」

そうか。 だから、カップルたちはケビンに協力していたんだ。でも、何故？

「今回もたくさん儲けた。 だが、一番価値があるのはお前の日記だな」

「まさか！ お金で釣つたの……？」

するとケビンは冷酷なまなざしで僕を睨みつけた。

「俺のビジネスの邪魔はしないで欲しいね」

どうしようもない。

カギというカギがしめられ、密閉されている。ケビンはクロ口ホルムを含ませたハンカチを持っている。それを吸わされたら、確実に奴等に日記を奪い返されてしまう！

出口は無い。いや、無いに等しい。

リトルは拳を握り締めた。

「取り押さえる！」

ケビンの一言により、男達三人が僕等に差し迫った。羽交い絞めにして、身動きを取れなくさせる。

僕には一人が、リトルには二人が取り押さえに就いた。

「さあ、良い子は寝る時間だ！」

「寝て、たまるもんか！」

僕は必死で抵抗した。だが、力が叶わない。何せ、奴等は上級生だ。力で勝てないなら、頭を使うしか……

だが、どうしたら良いのかわからない。冷や汗がじつとりとほほを伝った。

リトルは必死に何か策を練っているのか、じっとして動かない。

ケビンが、今まさに袋を結び目を空けようとした瞬間、リトルは男共二人を一蹴した。

そして、再びリトルにとってかかろうとした瞬間、リトルはすかさずスカートを捲くって隠しておいた拳銃を取り出した。

「貴様等、それ以上近づくな。近づいたら、引き金を引く。それでお前等は、眠っちまうのさ」

恐ろしい発言に、僕は寒気がした。

「汚ねえぞ、お前」

ケビンたちは、悪態をつきながら、手を上げて僕等から遠ざかった。しばらくの間、きつく腕を縛られていたものだから、肩の感覚がおかしい。

僕はリトルのところへ駆け寄った。冷や汗が余計に冷える。そして、ケビンの様子を見ると、悔しそうにリトルのことを睨んでいる。僕も含まれているのか。

「レンディ……私が銃を打ったら後ろの窓から、逃げる」

「へ?!」

後ろの窓……僕は振り返った。さっき、ケビンが日記を放り投げて割った、窓だ。

割れた隙間から、夜風がすうすうと入り込んで、かなり寒い。しばらく窓の外を見つめっていると、アパートの頭上をとおり越して、真っ直ぐと僕の前へ進んでゆくヘリコプターが見えた。その音が嫌な予感をさせる。気味が悪い。

「大丈夫、弾は入っていない」

「いや、そういうことじゃなくて……」

しかし、僕がそういうか言わないかの内に、リトルは銃の引き金を引いた。

音だけであると分かっても、すごい銃声が鳴り響く。

当然、彼等はまさか銃弾が込められていないものだとは知らないわけだから、リトルが引き金を引いた瞬間悲鳴をあげて、立ち退いた。

混乱している。

その際に、僕はリトルに担ぎ上げられ、窓の縁から外の世界へと飛び出した……。

第四十九話・出迎え

冷たい夜風が耳を横切り、真つ逆様に地面へと近づく。

僕は、一番下で落ちしまうのかと思っただが、案外すぐそばで着地した。ころげるようにして、着地したあと、すぐに立ち上がった。背後は、三階建てになっている。

どうやら、ここだけが二階建ての棟のようだ。

広さは、二メートル四方ほどで、何も無い。ただ、真中に換気扇のようなものが、置かれているだけである。

周りはフェンスで囲まれ、それを越えたら、すぐ真下には植え込みが広がっていた。

僕は、飛び出した窓の方を振り返った。
ケビンたちが、窓の中から覗いている。

「そんなことをしたって、無駄だぞ！ こっちのほうが早い」

僕は何かを言い返してやろうかと思っただが、すぐリトルに止められた。

「ぐずぐずしている暇はない。今すぐ、下に降りよう」

僕は、彼に背中を押され、それと同時に駆け出した。

何処に向かっている？ 僕は焦っていてその理由がよくわからない。

行く先は、フェンスでふさがれている。

リトルは、そのフェンスを飛び越えた。

僕は、その後からよじ登って、なんとかフェンスを越えた。

足元には、うっそうと生い茂った木々が、風に吹かれてざわめいている。

それとも挑発しているのか……。

「飛ぶぞ」

リトルは静かにそう言った。

「飛ぶの?!」

「ああ、飛ぶんだ。早くしなければ、奴等に追いつかれてしまう」

いくら急いでいるからとて、こんな無茶な方法を踏んでは、怪我をしてしまう!

さっき飛んでいった、あのヘリコプターつかまることが出来れば……いや、それはできない。飛ぶしかないのだ。飛べないレンディは、ただのレンディだ。

リトルは運動神経が良さそうだが、僕は運動が苦手である。

だが、他に良い方法もない。フェンスで囲まれている、ということ、この棟はフェンスを越えることなど想定していないづくりをしているのだ。

僕は渋々了解した。

「……わかったよ。でも、何かあったら、絶対責任を取ってもらうんだからね!」

まさか、この一言が、あとで僕に振り返ってくるとは、思いもしなかった。

「ああ、取ってやるとも！」

すると、リトルは僕を抱えて、ひとおもいに（窓を飛び出したときと同じように）飛んだ！

真つさかさまに、木の枝を突つきり、木の葉の中におぼれる。

小枝がほほを引っかきながら、僕たちは枝に叩きつけられるようにして、木の中に留まった。

しばらくの間、痛くて声が出ない。おかしなところを強く打った。

だが、リトルがクッションになってくれたおかげで大怪我は免れたようだ。

しびれて感覚の薄い足腰をさすりながら、僕はなんとか体制を整えようとした。

その瞬間、リトルが悲鳴をあげた。

「どうしたの？」

「構うな！ さっさと行け」

「まさか、骨でも折ったんじゃない？」

僕はそう思って、すぐに身体をどけた。

「の、ようだ……。すまないが、ひとりで日記を探してきてくれないか？ 私はあとから追いつく」

「わかったよ。先に行く。でもあとで戻るから！」

すると、リトルは力なくフンと笑って顔を引きつらせた。

「精々よくやれよ」

僕は、するりと木から降りたあと、鬼のように目を光らせて日記を探した。

草の陰や、木の根元などに目を走らす。

暗い夜道を昼間のときと、同じ感覚で歩くのが難しいように、それも難航を極めた。

……しかし、あった！ 暗いところに黒い本なんて、色が同化してよくわからないだろう。

だが、それは確かに見つかった。

なぜなら、ページが開いていたから！

白っぽい物体だ。すぐにわかる。

僕はのどから手が出る思いで、その本にかじりついた。

大丈夫。本は、なんとか無事のようにだ。

僕が中身を確認していると、よろよとリトルが近づいてきた。

「日記は……大丈夫か？」

骨折した部分が痛むのか、顔を引きつらせながら、押し出すような声で問い掛ける。

「うん！ 大丈夫みたい」

「それは……よかった。早く行くぞ」

しかし、希望が見えた瞬間、ケビンたちがアパートの正門から、こちらに向かつて、走ってきた！

どこまでも追いかけてくる奴らは、まるで悪魔のようである。

「クソ！ 何処までも執念深い奴等だ！」

リトルが悪態をつくくと、最後の力を振り絞って、彼は走り出した。

「お前も逃げ！ 日記を取り返すんじゃないのか？」

僕は時々よろけそうになるリトルを構いながら、出口を探して、走った。

セントラルアパートは、四角い建造物だ。その周りを取り囲むようにして、僕の身長より一メートルほど高い塀が建てられている。出入り口は、最初に入ってきた正門以外に見当たらない。

まず、僕がいるところから正面を十数メートルほど進んで、右側につきあたったところにある正門はボツだ。ケビンたち七人の内、四人が待機している。

僕等は反対方向から、他の出口を探すしかない。アパートの裏庭を通っていく通路だ。

僕は、反対側に逃げることにした。

しかし、それに気付いたのか、僕を追ってくるケビンたち三人の内一人が、正門の方へと向かっていった。

きつと正門で待機しているやつらに指示を出すつもりなんだ！

その指示の内容なんて、大体予想がつく。

僕は舌打ちをして、必死に出口をさがした。

どこもかしこも、塀で囲まれている。それ以外には植え込みしか

ない。じめじめとして、暗い裏庭だ。

暗闇に隠れることもできるかもしれないと思ったが、すぐに見つかるだろう。

焦る気持ちだけが、今の僕に打ち勝とうとしている。

二つ目の角をまがる。ここはおそらく、アパートの丁度真後ろの位置にあたるのだろう。

そこで、運は味方してくれた……！

「ねえ、あそこに非常用階段があるよ！ あれを使って、屋上まで逃げられないかな……」

「そうだな。……だが、それは私の体力がもてば、の話だ」

僕は、あの非常階段を上って屋上に隠れられないか、考えた。だが、ケビン達が追いつかなければ、の話しである。もちろん、ケビンたちが追いつく前に上りきる自信は、あまりなかったし、リトルの言った先の発言が、それに拍車をかけた。

「じゃあどうすれば……」

そうこうしている間に、ケビンたちのわめき声が近づいてくる。

非常用階段に上がるまでが、問題だ。

それなら、今、上れる僕だけが、非常用階段を上って、何か手を打てないものだろうか……。

そもそも、ケビンたちは、僕が日記を持っているものだと思っているのだろう。実際、僕が日記を手に行っている。

そうか。合えてそれを利用すればいいんだ！

僕はリトルに耳打ちした。

「おお、それは良い考えだな」

リトルは納得してくれた！ 僕の言った意見を聞き入れてくれるなんて、今日はなんて幸福な日なんだろう！ そして、リトルは「私の苦勞が減ったな。お前のやることが終わり次第、あとは私の出番だ」といった。

嫌なことが続いて重なった後には、必ずいいことが訪れるものだ！

僕は、リトルに日記をあげて、ケビンたちの方へ向かっていった。正門から出るつもりだ。

リトルには、時間を稼いでもらう。

途中で、ケビンたちに止められたが、僕は、日記を持っていないことを主張して、リトルの方へ注意を向けさせた。だが、大丈夫。彼は、日記を所持していないし、銃で身を守る。

日記を渡すかわりにこの銃の引き金を引くぞ、とでも言って、脅してやればいいんだ。

そして、正門から出ると、すぐそばにリトルの車が止めてあった。僕は、座席のところに絡まって落ちていたロープを取って、リトルのところへと戻った。

リトルは、予想したとおり、ケビンたちを相手に、時間を稼いでいた。銃を片手に、両者とも身動きできない様子である。当然のことながら、リトルの足はそろそろ限界に達したようだ。

「ケビン！ 今回はきつと、僕の勝ちだ！」

僕はそう言いはなつて、非常用階段を上り始めた。

ケビンたちは、一体僕が何をしようとしているのか、理解できな

いらしい。

ロープは服の中に隠してある。

まさか、このロープを使って……だなんて、あいつ等にはきっと
思い付かないハズだ。

最後まで上り詰めた後で、僕は、リトルにメールを送った。

送信メール001

12/24(日) 23:51

宛先: little-vegney@abchotmail.com

添付: x

件名: 屋上についたよ!

- - - e n d - - -

すると、下の方で、銃声が響いた。よし、上手くいつている！
計画どおりに言っているのなら、彼は、銃が偽者だと言う事を明
かした上に、僕が日記を所持しているという嘘を彼等に教えたハズ
だ。

非常用階段の下の方を確認すると、大急ぎで彼等が上り詰めてき
た。

あとは時間の問題だ！

とりあえず、リトルも屋上の上に引き上げることはできる。

三階の屋上には、二階の屋上と同じように、換気扇があった。
あれを利用するのだ！

僕は、片方のロープをリトルのいるところへと垂らした。
十メートルほど上したところで、わずかにロープはひっぱられた。
合図だ。

僕は、ロープの片方を左手で抑えながら、ポケットの中をまさぐった。

ポケットの中には、ジェシーのホテルで使った睡眠薬の残りが、箱に入って取っておいてある。

ぐちゃぐちゃに潰れていたが、なんとかつかえるだろう。

それをロープの先端に巻きつけ、換気扇の回転しているプロペラの中に放りこんだ。

しかし、一度目は弾き返されてしまった。

やはり、あれだけの動力で回転しているから、そう簡単には、プロペラの隙間に入り込めない。

僕は、もう一度、換気扇の中に睡眠薬の箱を投げ込んだ。

するとどうだろう！バリバリと睡眠薬の箱が弾かれる音が聞こえながら、どんどんロープがからんで、ロープの先につかまっていたリトルを引き上げていく。

途中でロープが切れてしまいやしないかと不安にもなったが、なんとか最後まで持ちこたえてくれた。

「さて、どうする？」

屋上が上がってきたと同時に、リトルは挑戦的な目つきを僕を見つめた。

はっとした。僕は、ここまできて初めて、大きな失敗をしていることに気が付いた。

それは、

”ケビンたちを追い返せない”

と、言うことだ。

リトルの銃が偽者であるということは、既に彼等に知れているし、僕が日記を持っているということも、知っている。それに、リトルは自分の大仕事ができるまでは、まだ時間がかかるらしいことを仄めかした。

どうすればいいのか。

「ごめん、もうこれ以上はいい考えが思い浮かばないよ」

僕がそう言った瞬間、リトルはニヤリと笑った。

「予想外に早かったな」

またヘリコプターの音が近づく。不吉な予感だ。彼は絶望しているのだろうか。彼は絶望し

ヘリコプターはケビン側を応援しているようにしか思えない。

もう逃げ道が無いということを楽しんでいるのか。

「レンディ、後ろを見たまえ」

僕は、振り返った。強い風が僕等に吹き突ける。

そこあったのは、ケビンたちではなかった。

そして、まぶしい光が、屋上一帯を照らし出す。規則的な風を

切る音が聞こえた。

「へ、ヘリコプターが……いつの間に……」

凄い光景だ。上空からものすごい風を屋上に叩きつけながら、轟音とともにヘリコプターがやってくる。

「だから、お前の意見に賛成してやったのだ」

リトルは、このことを目的に、僕の意見を尊重したのだ。最初からこうするつもりだったのだろうか……？ リトルの予想外の手柄に僕は圧倒された。

「ヘリコプターは、もともと呼ぶつもりなどなかった。彼等を倒して、車で逃げればいいのだからな。だが、もつと良い方法があった」

リトルは、ヘリコプターに向かって、大きく手を振った。

「もつと良い方法って、このことなの？」

「そうだ！ 奴が窓を突き破ってくれたおかげで、私は、その窓に注意を寄せられた。だから、知り合いのヘリコプターが飛んでいるところを捕らえられたのだ。それに、お前のアイディアもある」

あのヘリコプターは知り合いのものらしい。

とは言っても、こんなに都合よく、助けに来てくれるものだろうか？

「奴を納得させるのは、困難だった。お前を木から下ろして、先に行かせたときに、私が奴と連絡を取ったのだ。何かの用事の最

中であつたらしいが……普段は非情な彼だが、今回は私が非常事態であるということから察知してくれたらしく、助け舟を出してくれた」

リトルがそう言い終わる頃には、ケビンたちの声が近づいてきていた。

もう、あと数十秒かで、屋上にたどり着いてしまつたろう。

焦る気持ちを抑えながら、僕はヘリコプターから救助が出されるのを待った。

第五十話・冬休みの始まり・

目を細めて、ライトのまぶしさに耐えながら、ヘリコプターを見守っている、不意に男の声が聞こえた。どこか、聞き覚えのあるような気がする。きっと似ているだけだとか、そんなんだろうと僕は思った。

僕は、リトルと同じように、大きく手を振って、合図を送った。どうやら男の声はヘリコプターの方から聞こえてくるようだ。

縄梯子が垂らされた。上で男が「つかまれ！」と叫んでいる。ヘリコプターの上にいる男は、さっきからこれを言っていたのだろう。

リトルを先に縄梯子につかませ、その後を追うようにして僕が縄梯子を掴んだ。ケビンたちが迫ってくる。

だが、先頭にいたケビンの手が縄梯子に触れることなく、僕たちはアパートを離れた。

ここまで来れば、もうケビンたちは追ってくるまい……。

勝ち誇った安心感と、ヘリコプターの不思議な抱擁に包まれて僕たちはセントラルアパートを後にした。

あれから二日後。

僕は初めて乗ったヘリコプターに感動を覚え、それについては事細

かに日記に記すことにした。

日記に書くことなら、他にもある！

ジェシーを夢魔から救ったこと。ケビンたちのアパートで起きた騒動。そして、リップの家での嫌な出来事……。

一番最後の出来事はさておき、とにかく、クリスマスの日はとてもたくさんのが起こった。

いつもなら家で静かに過ごすはずなのに、この日はかりはそういうようには行かなかつたらしい。

とことん、日常生活を奪われている気がする。

ところで、ヘリコプターによって救助されたあの日、リトルの車はどうなったかというと、あとから召使の一人がリトルからカギを預かって、車を僕たちのいるところまで運んできてくれたらしい。

なんといい、気遣いだ。彼（ヘリコプターに乗っていた人）は本当に、リトルの言っていたとおりの”非情”な輩なのだろうか。そうとは思えない。

男は、確か全身紫色の服を着ていた。ベルベットのような高級そうな生地で出来たコートを着流していたと思う。中世ヨーロッパの世界から飛び出してきたような、感じの風貌だ。

男はたいそう、優美な雰囲気を感じていた。優しく、穏やかな顔をしている。

僕達が男の家に到着したとき、彼は、玄関先でこう言った。

「ご苦労様だったね。 ゆっくりと休んでいけばいい」

非情というのは、リトルの単なる思い込みなのだろうか。

一方で僕は、彼の優しい雰囲気、そこはかとなく惹かれた。

だが、きつと金持ちか何かの類に違いは無い。
家のつくりや、着ているものからして、そうだ。

優しいと思わせておいて、実は金にがめつい奴だったらどうしよう……。
それにしても、彼とは、前に会ったことがあるような気がしてならない。

どこかで、見たことのある雰囲気をもった人間だ。一体何処で彼を見たんだっけ……。

僕たちは、リビングに連れて行かれた。

しばらくの間、そこに置かれた幅の広いソファに座って、彼とリトルは話し合っていた。僕は彼等の向かい側に一人で座っている。

リトルはケガのことや、僕の事情についてを彼に説明していた。

(何せ、僕はケビンの家に泊まるといって、家を出てきてしまった。途中で帰ってきたら、一体何事なのかと、思われるだろう。僕がどういいたけをしても、母さんはケビンの親に連絡を取って事情を聞き出すに決まっている。それでは今までに起こった出来事の言い訳をするのが面倒くさい)

それにしても広い家だ。天井には綺麗な装飾が施されている。

絵画が一面に描かれているようだ。

暖炉は、高さが一人分あって、横の長さはその倍だ。あれだけ大きな暖炉でなければ、きつとこの部屋全体を暖めることが出来ないのだろう。

リトルは、男と話を済ませると、僕のところに目を向けた。僕はさっきから、ソファにすわりながら男の家を見渡していた。

「レンディ？ 今日はこの家に泊まる。いいな」

僕は、さっとリトルの方に振り返った。

「え、ここに……？」

「そつだ。わざわざ泊めてもらうのだから、彼に感謝しろ。彼は……」

リトルが男の紹介をしようとしたとき、彼は自分から名乗り出てきた。

「ウィル・ウィツシュだ。普段は伯爵なんだけど、ここでは伯爵だと言わないことにしよう。よろしくね」

ウィルは手を差し出した。握手をしようという意図を示している。
「ぼ、僕、レンディ・クローズです。よろしく……」

僕はおずおずと握手をした。冷たい手だ。彼は手袋をしていたが、骨っぽいのがわかる。それにしても、普段は伯爵だが、今はそう名乗らないというのは、どういうことだろうか。

「さて、部屋を案内しよう。今のところつかえる部屋があまりなくてね。付いてくるといい」

僕たちはウィルに案内されて、各々の部屋へと向かっていった。まるでこの家は迷路のようだ。長い廊下の両脇には、いくつものドアがある。

いったい、どれが僕達の止まる部屋なんだろうと、ワクワクしながら

らウィルの後についていった。

二階に上がって、十メートルほど進んだところに、僕の部屋を見つけてくれた。

一階と同じような廊下が続いている。

残念ながら、リトルは別の部屋で泊まるらしい。ちえつ。せつかく仮面の下を覗いてやるうと思っただのに！

僕が案内された部屋は、二匹のライオン絵が壁に描かれている部屋だった。

淡い光で、薄暗く照らされている。ジェシーの家を思い出した。

確か、彼女の家もこんな感じの高級そうな雰囲気をもっていたと思う。

部屋はベットが一台と、椅子があるだけだった。シンプルなのに、ライオンの装飾だけが妙に際立っている。これはライオンを絵を目立たせるためなのか……？

僕はベットに寝転がった。気付くと僕は、眠っていた……。

翌日、僕等は家に帰ることとなった。

車を出すとき、男の家の庭を眺められたが、それはそれは見事なものだった。

玄関を出てから、門につくまで三十メートルほどある。その間、両サイドには、綺麗に刈り込まれた芝生や幾何学的な模様の花壇があった。実に、綺麗だ。きつと春になったら綺麗な花が咲くんだろうな、と僕は思った。

そうして、家に帰った途端、僕は熱をだした。

きつとジェシーのホテルに行ったとき、薄着だったのがいけなかったんだろう。

だが、明日からは冬休みだ！ 風邪が治れば、いっぱい遊べる。

……そう思ったのもつかの間、僕はあることを思い出した。

「冬休みはできるだけ空けておけ」

そう。僕がリトルによって魔術師にされたときに、言われたことだ。

彼は何をたくらんでいるのか、僕には予想がつかなかった。

また会うだなんて、嫌だなあ。一体、今度はどんなことが待ち受けているのだろう。

面倒くさいったらありゃしない！

しかし、そんなことをいっていられるのも、今のうちだった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1347c/>

LENDY CROWZ 第二部

2010年10月19日02時04分発行